

藤原京右京九条二・三坊、 瀬田遺跡の調査

—第187次

1 調査の経緯

本調査は、奈良県橿原市城殿町に所在するポリテクセンター奈良（独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構奈良支部 奈良職業能力開発促進センター。以下センターと表記）の本館建て替えにともなう調査である。調査地は、飛鳥川左岸の緩やかな傾斜地に位置し、本薬師寺南方の藤原京右京九条三坊東北坪とその東の九条二坊西北坪、西二坊大路にあたる（図141）とともに、縄文時代から弥生時代の遺物散布地、瀬田遺跡の一部でもある。

センター敷地内では、1987年度の第54-18次調査北区で西二坊大路の東側溝を、1990年度の第63-3次調査で西側溝をそれぞれ検出している。2015年の第185-7次調査では、センター敷地外の北約180mの地点において西二坊大路の両側溝を確認しており、本調査区内でも西二坊大路が検出されることが期待された。また、2007年に奈良県立橿原考古学研究所がセンター敷地内でおこなった調査では、弥生時代後期末の土器集積土坑や縄文時代後期の遺物包含層が広がることが確認されている。

今回の発掘調査は、2015年11月25日より重機掘削を開始し、およそ9ヵ月におよぶ調査ののち、2016年10月5日に埋戻しを終了した。調査面積は2,019㎡である。

2 基本層序

調査区内の基本層序は、上位から造成土、水田土壌（床土）、黄灰色シルト、灰色粘土、黒褐色粘土と続き、これより下位は主に砂層からなる。灰褐色の水田土壌は厚く、細分が可能である。その直下にある黄灰色シルトは現地表面から約0.9m下位にあたり、これが第一遺構検出面である。黄灰色シルトはほぼ無遺物のシルト・細砂層（Hue 2.5Y 4/3オリーブ褐色）で、広範囲に厚く堆積した水流成の細粒堆積物である。藤原京期の遺構はこの黄灰色シルト上面で確認したが、これは弥生時代および古墳時代の遺構検出面と同一面である。遺構の残存深度からすれば、藤原京期の遺構群は深耕にともなう削平を受けているものとみられる。なお、現代の攪乱がことに著しかった調査区南半では、攪乱坑の間に黄灰色シルトが

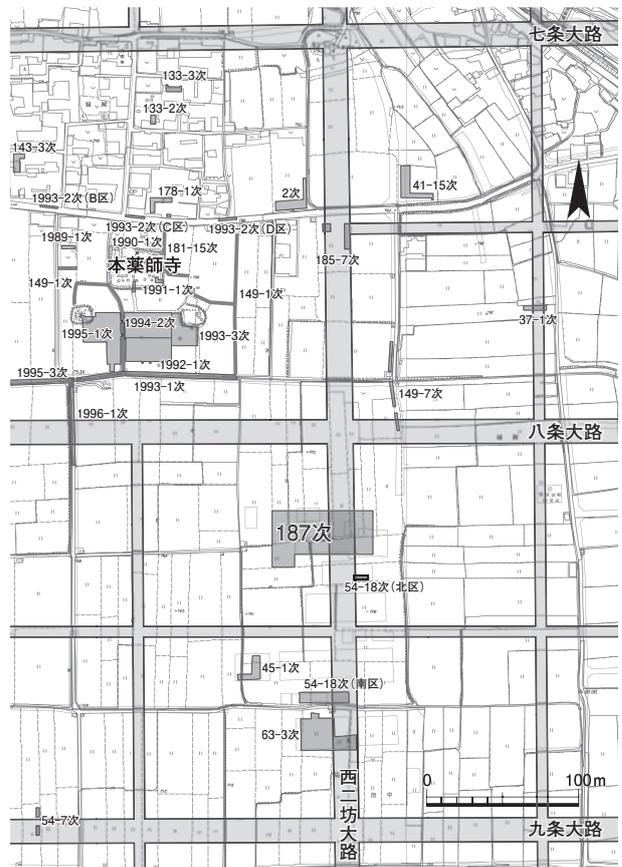


図141 第187次調査区位置図 1 : 5000

半島状に残っていたが、その直上には黒色砂質土が残存しており、もとは黄灰色シルトをおおう土壌が発達していたものと考えられる。出土遺物からみて、この土壌は弥生時代のものである。

黄灰色シルトの直下には層厚5cm程度のうすい灰色粘土（Hue 2.5Y 4/2暗灰黄色）があり、縄文時代から弥生時代の土器片を含んでいる。灰色粘土の直下には層厚20cm程度の黒褐色粘土（Hue 10YR 3/1黒褐色）があり、これが縄文時代の遺物包含層にあたる。灰色粘土と黄灰色シルトとの境界は概ね整合の関係にあるようだが、一部で灰色粘土以下が削剝を受けている部分があり、そこでは黄灰色シルトが黒褐色粘土を不整合におおう。つまり、灰色粘土の堆積以後、黄灰色シルトの堆積までの間には間隙がある。黒褐色粘土は縄文時代の古土壌で、炭化物粒をきわめて多く含み、草本類の種子を多量に産したところもある。後述する縄文試掘区のうち1ヵ所まで下層確認のための深掘調査をおこなったところ、黒褐色粘土の下位はきわめて軟弱な粗砂（層厚60cm）・細砂（15cm）と続き、その直下に有機質の黒色粘土（層厚15cm）があることを

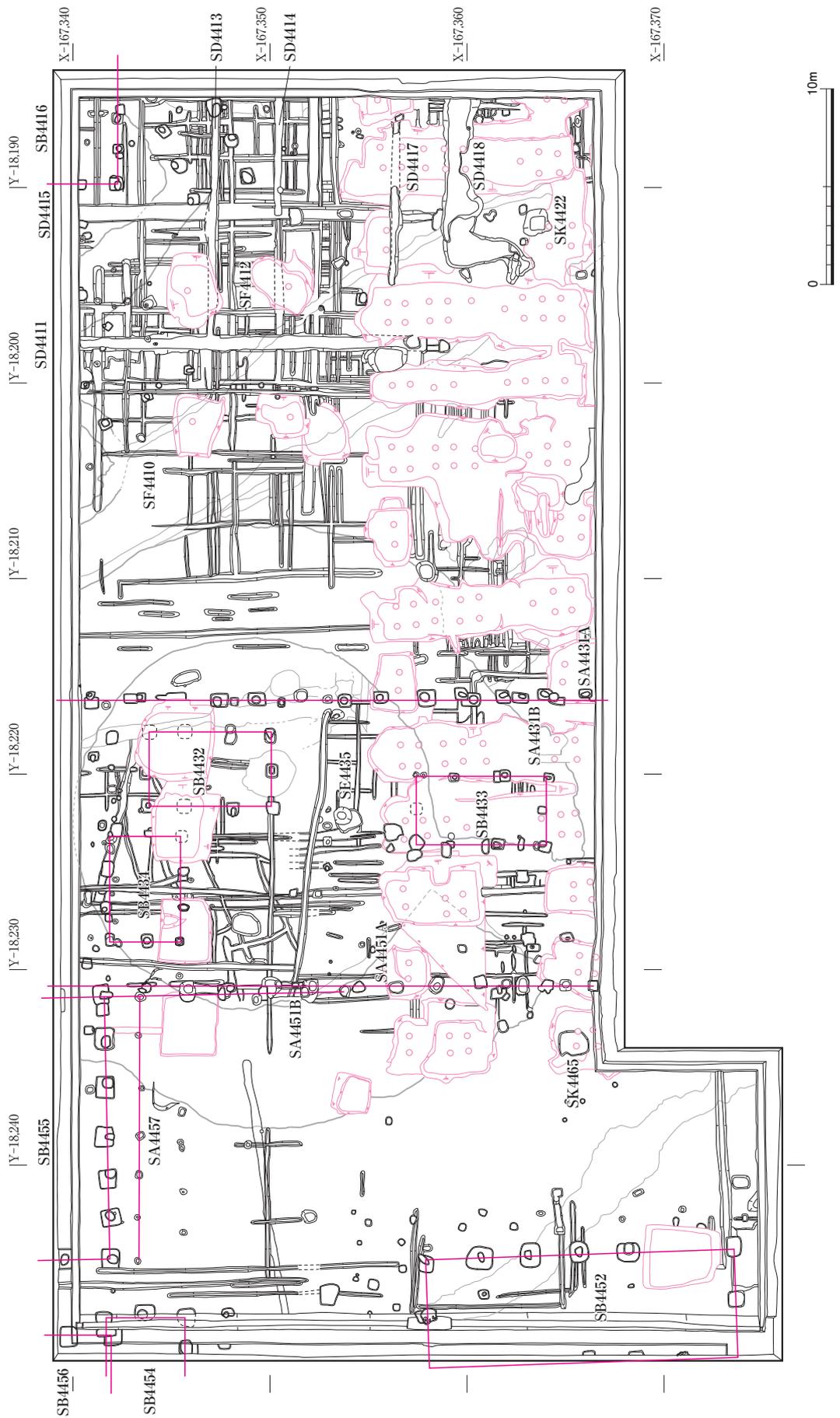


图142 第187次 藤原京期・平安時代遺構図 1 : 300

確認したが、遺物は出土しなかった。

なお、今回の調査区は東西約60mにわたる。地形が西へと傾斜してゆくため、遺構検出面の高さは東端と西端とでおよそ1.1mの差があり、西側が低い。しかし、上述の基本層序はほぼ同じである。

3 検出遺構

検出した遺構には、藤原京期の道路側溝や建物・堀・土坑、平安時代の井戸のほか、弥生時代の周溝墓・斜行溝、古墳時代に埋没した斜行溝がある。また、これらの遺構の下層には縄文土器・石器を包含する黒褐色粘土層があり、明確な遺構は確認できなかったものの、縄文土器・石器が多数出土した。以下、藤原京期から平安時代の遺構（図142）と、弥生時代から古墳時代の遺構とについて述べる。

条坊関連遺構（藤原京）

南北道路SF4410 調査区東部で検出した南北道路で、路面は削平を受けている。周辺の調査成果を勘案すると、次に述べる南北溝SD4411が東側溝とみられる。西



図143 南北溝SD4411（北から）

側溝は削平のため検出できなかったが、後述する堀SA4431Aおよび堀SA4431Bが九条三坊東北坪の東辺を区画する堀とみられ、周辺での調査成果をふまえると西二坊大路にあたる。道路幅は16m前後と推定される。

南北溝SD4411 調査区東部で検出した南北溝（図143）で、検出長約20m、幅約0.9mで、深さは0.3mである。調査区南部では現代の攪乱などにより残らない。埋土上部は褐灰色砂質土で、下部は褐灰色砂質土である。底面には起伏がある。既往の調査成果を考慮すると、西二坊大路東側溝にあたる可能性が高い。

右京九条二坊西北坪の遺構（藤原京）

東西道路SF4412 調査区東部で検出した、東西溝SD4413・SD4414を両側溝とする幅約2.7mの東西道路。九条二坊西北坪を南北に二分する坪内道路とみられる。路面は削平により残っていない。

東西溝SD4413 東側溝SD4411の東肩から東へと延びる東西溝で、検出長約12.0m、幅約0.8m、深さ0.2m。埋土は褐灰色砂質土で、南北溝SD4411と共通している。

東西溝SD4414 東側溝SD4411の東肩から東へと延びる東西溝で、SD4413の南2.7mの位置にあり、検出長約12.0m、幅約0.7m、深さ0.1m。埋土は褐灰色砂質土で、南北溝SD4411と共通している。SD4413とは心々間で3.2mを隔てている。

南北溝SD4415 SD4411の東方約6.0mの位置にある南北溝で、検出長約15.0m、幅約0.7m。埋土は灰色の砂である。溝の大部分は南北方向の耕作溝により両肩を破壊されており、調査区南部では現代の攪乱などにより残らない。溝肩を検出できた部分での深さは約0.3mである。埋土からは須恵器杯H・同壺が出土した。

L字形溝SD4418 調査区東南部で検出したL字形の溝で、長さ9.0m以上、最大幅2.0mの東西溝が、その西端で南へと折れ、わずかに南へと延びている。東西溝の部分は断面矩形を呈し、検出面からの深度は約0.5mと深い。調査区東端では、弥生時代の土坑SK4493と重複しており、さらに東へと延びる。埋土上部は暗褐色砂質土で、下部は木屑層を挟んで青灰色粘土となる。西端の南北溝は南に向かい徐々に浅くなり、土坑SK4422付近でとぎれている。埋土からは藤原京期の土器・瓦が出土した。

東西溝SD4417 調査区東部南寄りで検出した東西溝

で、大部分を現代の攪乱坑によって破壊・寸断されており、南北溝SD4411の西側では確認できていない。検出長約8.4m、幅0.5mで、深さは0.4mである。埋土は暗褐色灰砂質土で、藤原京期の須恵器杯・土師器杯などが出土した。

土坑SK4422 調査区東南部で検出した土坑で、直径約1.2m、深さは0.9m(図144)。断面形は漏斗形をなす。埋土からは藤原京期の須恵器壺が出土した。

建物SB4416 調査区東北隅で検出した東西棟掘立柱建物。桁行3間以上、梁行2間以上(5.4m以上×3.6m以上)で、調査区外へと延びる。柱間寸法は、桁行・梁行ともに1.8m(6尺等間)。柱穴は一辺0.5~0.6mの隅丸方形で、深さは0.3~0.6mである。

右京九条三坊東北坪の遺構(藤原京)

南北塀SA4431A 調査区中央部で検出した南北塀。12間分(25.1m)を検出した。柱間寸法は1.8~2.4m(6~8尺)である。柱穴は一辺0.4~0.7m、上部が大きく削平されており、残存する深さは0.1~0.2mと浅い。西二坊大路に面し、九条三坊東北坪の東辺を画する区画塀と考えられる。

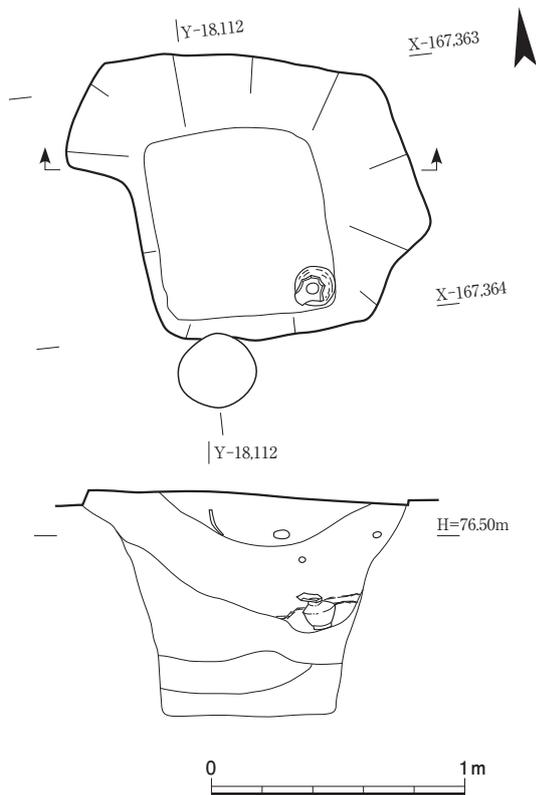


図144 SK4422遺構図 1:30

南北塀SA4431B 調査区中央部で検出した、SA4431Aと重複する南北塀。8間分(計18.2m)を検出した。柱間寸法は2.4m(8尺)。柱穴は一辺0.4~0.7mで、深さは0.1~0.3mと浅く、SA4431Aより相対的に小さいものが多い。柱穴の重複関係からSA4431Aより新しく、SA4431Aと同じ位置で建て替えたものである。南側3間分と北側5間分との間で柱がとぎれており、この場所に入出口が開いていた可能性がある。

南北塀SA4451A SA4431AおよびSA4431Bの西側15.0m(50尺)の位置にある南北塀(図145)で、その大部分を周溝墓SZ4500西周溝の掘り下げ中に検出した。少なくとも11間分を確認し、調査区の南側へと延びるものとみられる。柱間は2.1m(7尺)等間、柱穴の深さは0.5~0.7mで、SA4451Bの柱穴よりも深い。

南北塀SA4451B SA4451Aのやや西側に位置する南北塀で、多くはSZ4500墳丘部の西端付近で検出した。柱間は2.1m(7尺)等間、柱穴の深さは0.3~0.4mである。塀SA4451Aの柱穴を壊すことから、これより新しいが、5間分を確認したにとどまる。また、その北端は東西棟掘立柱建物SB4455の東南隅柱につながる可能性がある



図145 塀SA4451A・SA4451B(北から)

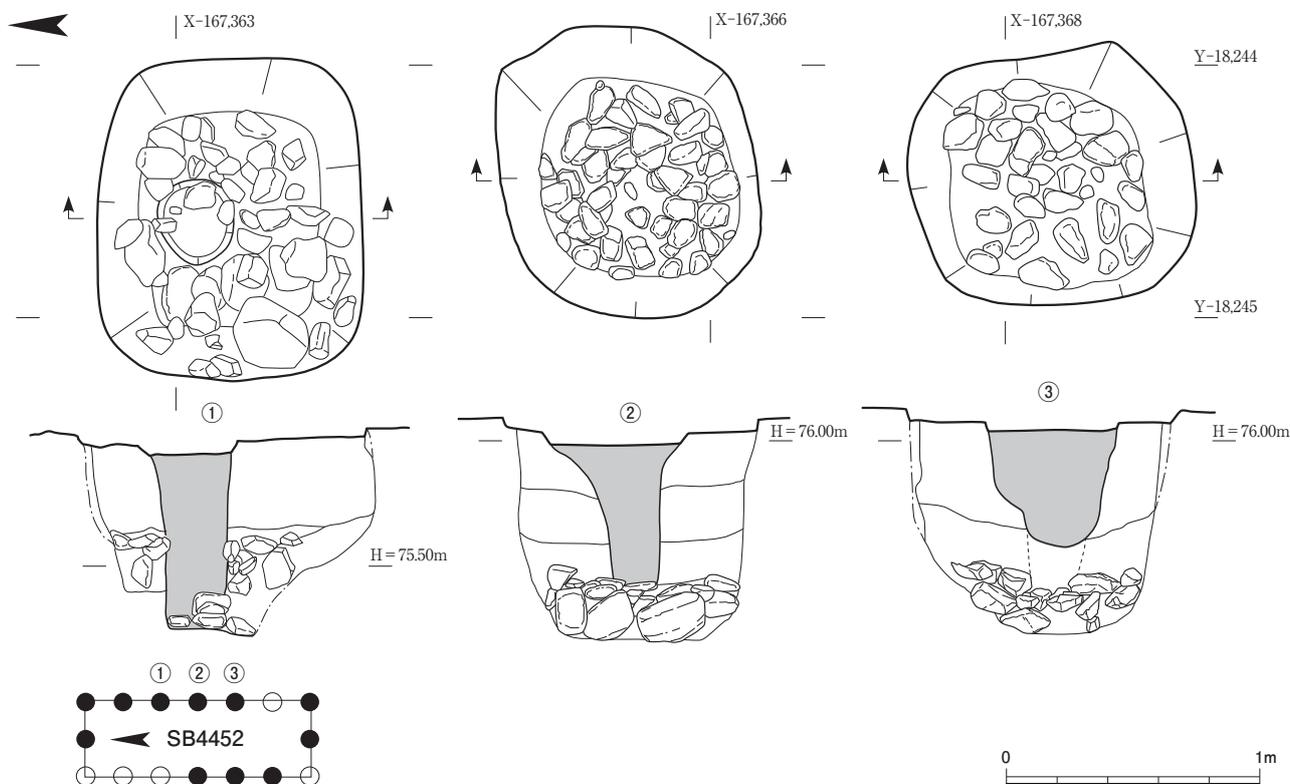


図146 SB4452柱穴遺構・断面図 1:30

る。西周溝の南半では、周溝埋土の掘り下げ時にその続きを確認できなかったが、これは周溝埋土と柱穴埋土との識別が困難であったため、周溝の掘り下げにともない、気づかずに破壊したものがあるかもしれない。柱穴はSA4451Aのそれより浅く、周溝底にはその痕跡は残っていない。

建物SB4432 調査区中央北半で検出した南北棟掘立柱建物。桁行3間、梁行2間(6.3m×4.2m)。柱間寸法は桁行・梁行ともに2.1m(7尺等間)。柱穴は一辺0.5~0.7mの隅丸方形、深さ0.2~0.4mである。現代の攪乱のため、東北隅柱と東西の側柱2本の柱穴は確認できない。

建物SB4433 調査区中央部南半で検出した南北棟掘立柱建物。桁行3間、梁行2間(6.6m×3.6m)。柱間寸法は桁行2.1m(7尺)であるが、中央間のみ2.4m(8尺)、梁行1.8m(6尺)である。柱穴は一辺0.4~0.7mの隅丸方形で、深さは0.2mを残すのみである。現代の攪乱のため、北妻柱の柱穴は確認できない。

建物SB4434 調査区中央部北半で検出した東西棟掘立柱建物。桁行3間、梁行2間(5.4m×3.6m)。柱間寸法は桁行・梁行ともに1.8m(6尺等間)。柱穴は一辺0.5~0.8

mの隅丸方形で、深さ0.3~0.4mである。現代の攪乱のため、東南隅柱の柱穴は確認できない。

建物SB4452 調査区の西南部で検出した南北棟の大型掘立柱建物。桁行6間、梁行2間(15.6m×5.4m)。柱間寸法は桁行の中央4間が2.4m(8尺)、両端間が3.0m(10尺)、梁行は2.7m(9尺)。柱穴は一辺0.7~1.2mの隅丸方形で、深さは0.5m。建物はほぼ正方位に近いが、北でわずかに西に振れる。複数の柱穴で、掘り底部付近に拳大の礫を詰め、柱の当たりのみやや沈下している状況を確認した(図146)。

建物SB4455 調査区の西北部で検出した東西棟の大型掘立柱建物。桁行6間、梁行2間以上(13.6×4.8m以上)。柱間寸法は桁行およそ2.1m(7尺)、梁行2.4m(8尺)。柱穴は一辺0.8~1.1mの隅丸方形で、深さは0.6~0.7mである。SB4452同様、北でわずかに西に振れる。建物周辺では足場穴とみられる小柱穴を検出した。またSB4455は、西妻の筋がSB4452の東側柱列とほぼ揃い、後述のSB4456とともに計画的に配置されたものと考えられる。

建物SB4454 調査区西北隅で検出した東西棟掘立柱

建物。桁行2間以上、梁行2間（1.8m以上×4.1m）。柱間寸法は、桁行1.8m（6尺）、梁行2.1m（7尺）。柱穴は一辺0.8～1.0mの隅丸方形で、深さは0.6～0.8mである。建物SB4456との先後関係は不明である。

建物SB4456 調査区の西北隅で大型柱穴2基を検出した。西側に延びる東西棟掘立柱建物の東南隅とみられる。柱間寸法は2.4m（8尺）である。柱穴は一辺0.9～1.0mの隅丸方形で、深さは約0.9mである。SB4456は、SB4455の西妻から3.6m（12尺）西、SB4452の北妻から15.3m（51尺）北に位置する。SB4456は、SB4455と柱筋を揃え、東妻柱列はSB4452の棟通りの延長線上に位置している。これら3棟の大型掘立柱建物は規則的な配置がうかがえる。

東西塀SA4457 建物SB4455の南側に位置する東西塀で、6間分を検出した。柱間は不等間隔で、SB4455とは振れが異なる。

平安時代の遺構

井戸SE4435 調査区中央部で検出した小規模な井戸で、掘方の直径は0.9m、遺構検出面から井筒最下部までの深さは0.6mである。井筒（曲物）は2段あり、上段は直径38cm、下段は直径44cmで、入れ子状に重ねてある。掘方の下部は井筒が収まる程度で余掘りはほとんどない。井筒内からは平安時代の土師器皿3点のほか、軒丸瓦（本薬師寺所用・6276E）1点が出土した（図147）。

弥生時代・古墳時代の遺構（瀬田遺跡）（図148）

円形周溝墓SZ4500 調査区中央部で検出した円形周溝墓で、南側に撥形をなす陸橋を備えたもの。その主軸は北でやや東へと偏している。墳丘の直径は約19.0mで、陸橋は長さ約7.0m、周溝を含めた全長は約25.5mである（図149）。周溝の北端は調査区外にあたるため未調査である。墳丘は後世の削平により、まったく残らず、主体部も不明である。また、陸橋部付近は先に解体された建物の基礎によって大きく破壊されており、保存状態がわるいが、周溝底から墳丘裾にかけての立ち上がりがほぼ垂直に近い部分があり、かつ黄灰色シルトと周溝埋土最下層との識別が可能であったことから、陸橋の東西辺をおよそあきらかにすることができた。南へと撥形にひろく陸橋は、墳丘の基底部と同様に黄灰色シルトを削りだしたものである（図151）。

周溝は東西ともに幅約6.0mであるが、陸橋部に近接

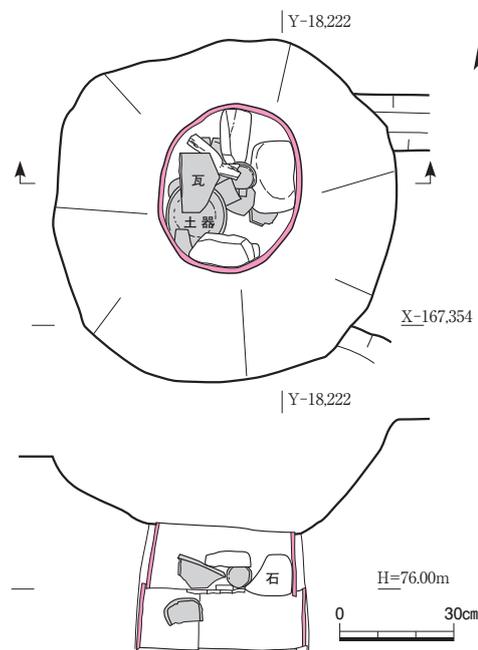


図147 井戸SE4435遺構図 1:20

するところは幅約7.0mで、陸橋の南端でとぎれている。また、周溝東南部には幅が5.0m未満となる部分がある。周溝の深さは、遺構検出面から約0.6mである。周溝底面の標高は、東周溝よりも西周溝のほうが約0.2m低い。底面の傾斜は、概ね地形にしたがったものである。

周溝埋土の標準的な層序は、上位から順に細砂・シルト互層（東周溝）または褐灰色砂質土（西周溝）、黒色粘土（有機質粘土）および黒褐色砂質土（周溝肩付近の斜面堆積物）、青灰色粘土ブロック層（加工時形成層）である（図150）。

このうち、加工時形成層の上面をおおう黒色粘土は、SZ4500の築造後、周溝が細砂・シルト互層または褐灰色砂質土で完全に埋没するまでの一定期間、湿潤な環境下で徐々に形成された泥炭質の泥土層であり、黒褐色砂質土はそのときに周溝墓の外側や墳丘から流入して周溝の縁辺に堆積した有機質の砂質土である。これらの土層からは多量の弥生土器が出土した。ことに周溝東北部からは完形品を含む土器が多数出土し、その多くが周溝外縁寄りの黒褐色砂質土からまとまって出土したものであった。東周溝の東肩付近（黒褐色砂質土中）からは転倒・倒立状態で（図152）、周溝の中央付近（黒色粘土中）では圧壊した状態で出土した土器が多く、転落または廃棄時の位置を概ね保っていると思われる。このほか、東周溝の北部から中央部付近の黒色粘土からは、樹枝やこれを

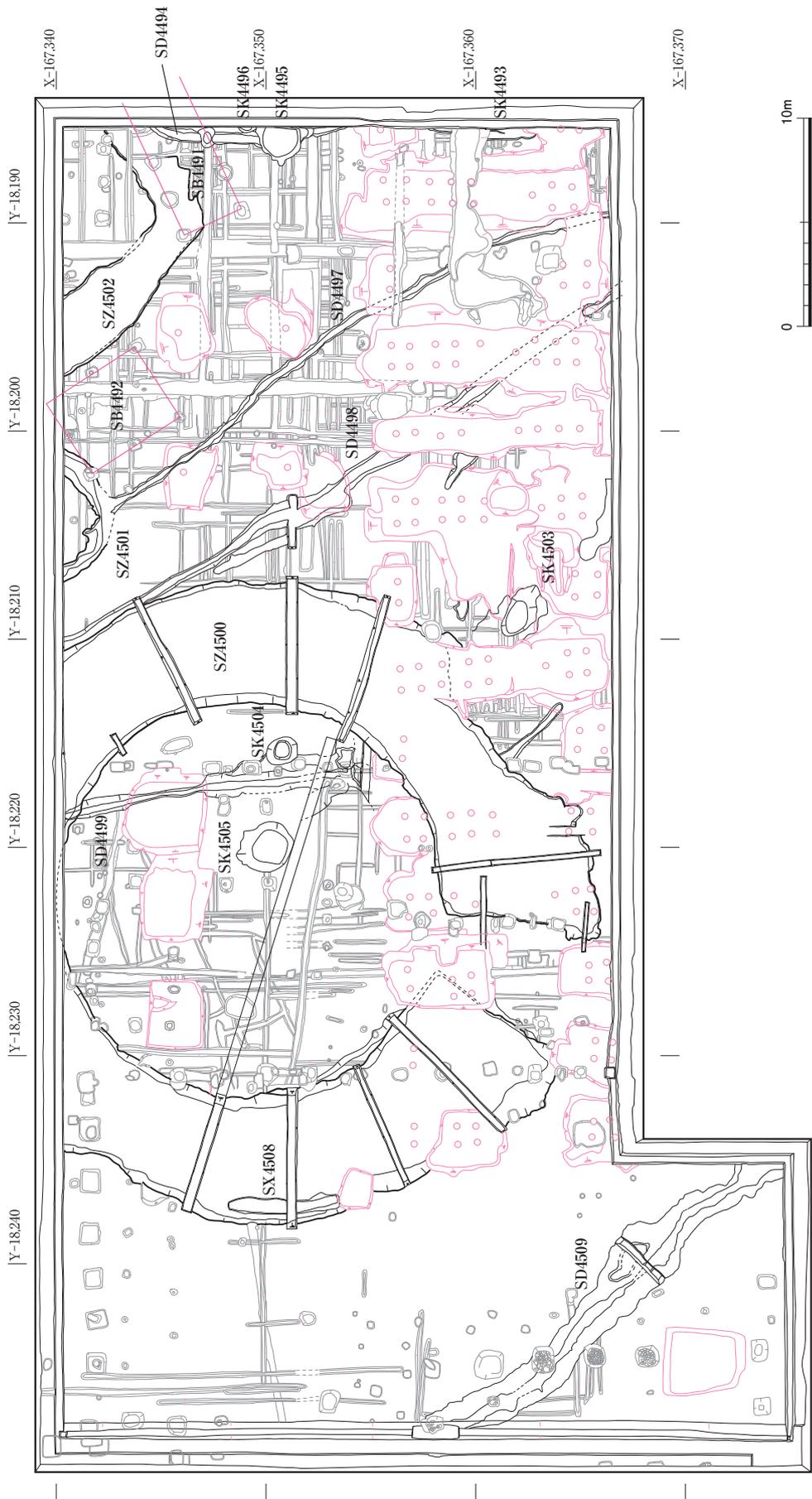


図148 弥生時代・古墳時代の遺構図 1 : 300

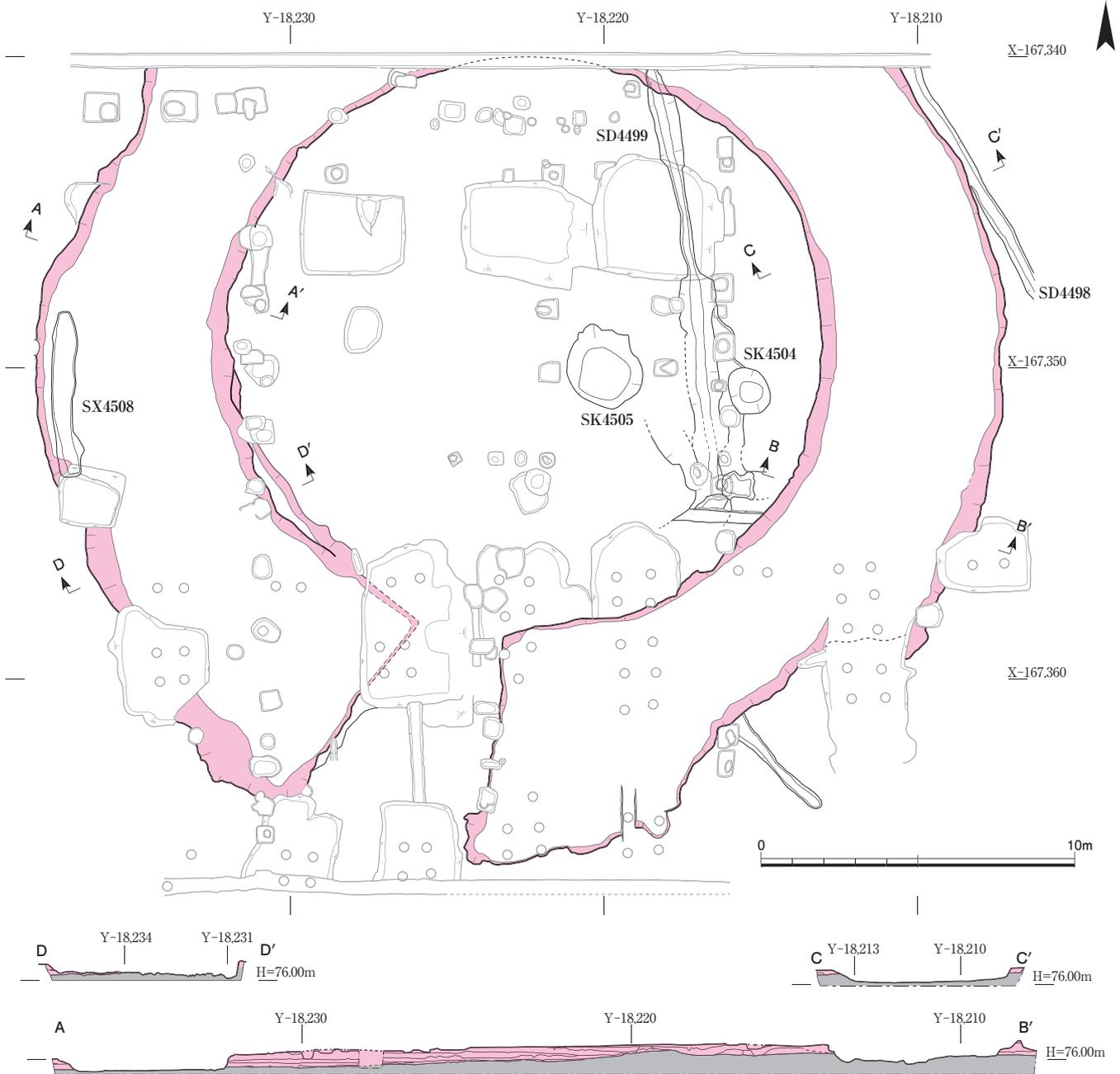


図149 円形周溝墓SZ4500遺構図 1 : 200

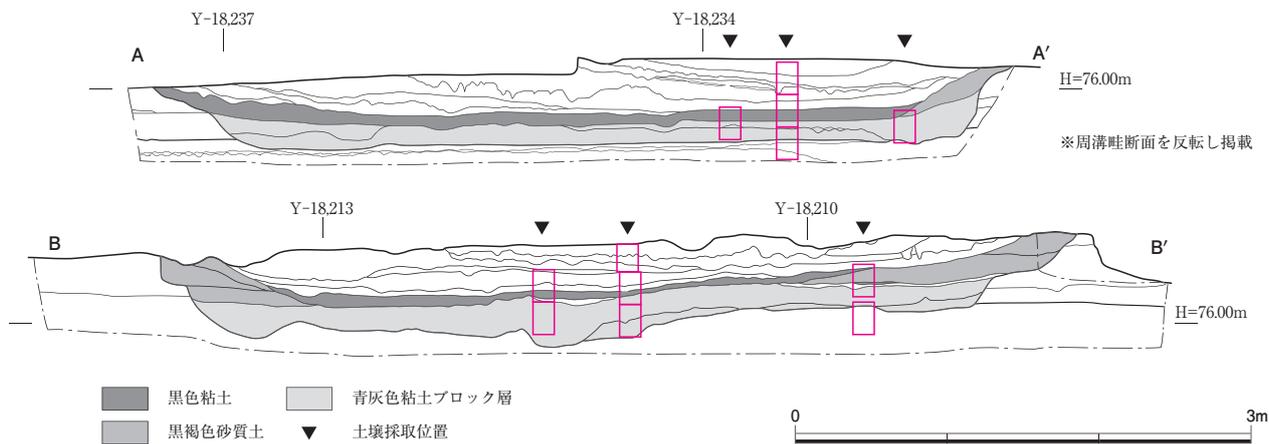


図150 円形周溝墓SZ4500周溝断面図 1 : 50



図151 SZ4500陸橋部（南から）



図152 SZ4500東周溝の土器出土状況（南東から）

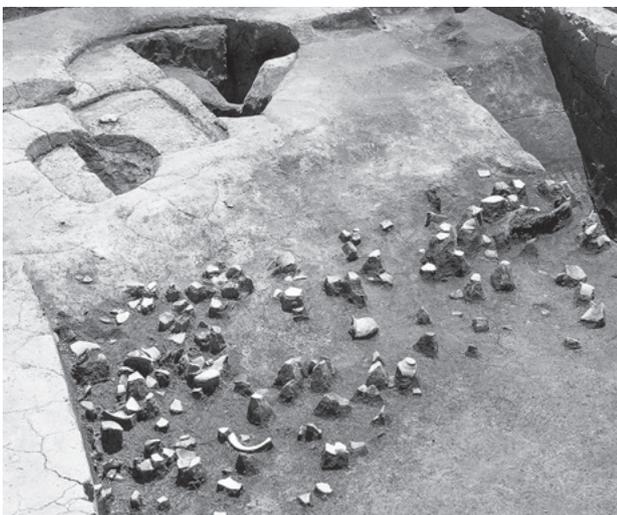


図153 SZ4500西周溝の土器出土状況（北西から）

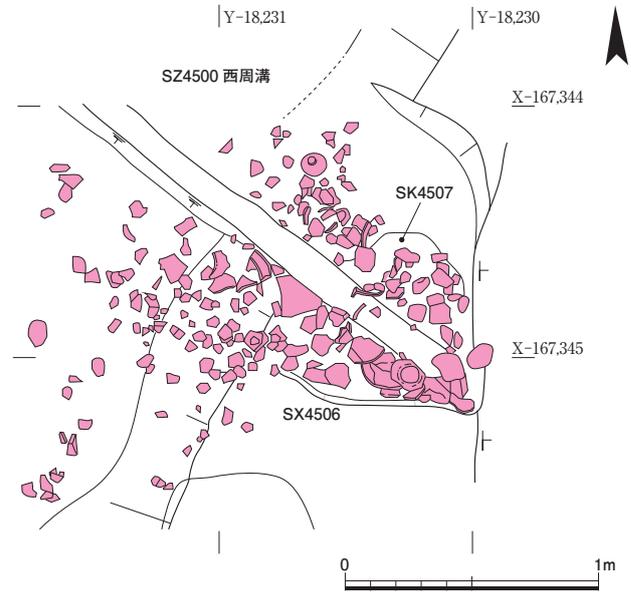


図154 SZ4500墳丘西側の土器溜SX4506 1 : 30



図155 方形周溝墓SZ4502（北西から）

束ねたとみられるものや、ほぼ全形をとどめた編みかごを含む木質・有機質遺物が出土している。

これに対し、周溝西北部では墳丘際の黒褐色土や、周溝底に堆積した黒色粘土から細片化した弥生土器が多く出土するなどし（図153）、東側とは出土状況がやや異なっている。西周溝の外縁寄りには南北5.4m、東西0.8mの溝状の土坑SX4508があり、周溝下底（青灰色粘土ブロック層上面）からの深度は0.4mである。

西周溝の墳丘際には弥生土器片がとりわけ集中して出土する一画があり、土器片が東（墳丘側）から西（周溝内）へと流れ込む状況を見せている（図154）。この土器溜SX4506の東部では土器片が大振りて覆瓦状に重なるが、周溝側では細片が多くなる。墳丘西裾の墳丘盛土が

ある程度流出しつつあり、西周溝の褐灰色砂質土として再堆積しているときに、細片化した弥生土器が集積したものであろう。この土器溜の下位では、弥生土器数個体を含む小土坑SK4506を検出しており、SZ4500築造以前に遡る可能性がある。

周溝東南部・西南部では土器の出土量が少なく、周溝下底や陸橋西裾付近から少量の弥生土器が出土したのみである。

周溝出土の土器はSZ4500の築造後、その周溝が埋没に転じるまでの間に転落・堆積したものである。なお、周溝は縄文時代の包含層にあたる黒褐色粘土を掘り込んでいるため、埋土最下層（青灰色粘土ブロック層）からは縄文土器片も出土している。

方形周溝墓SZ4501 調査区東北部で検出したL字形の溝で、さらに北へと延びる。墳丘が削平された方形周溝墓の周溝にあたりとみられる。周溝の幅は約1.2mで、深さ約0.4mである。埋土は黒色砂質土で、弥生土器片を含む。方形周溝墓の周溝西南部にあたりとみられるが、大部分が調査区外にあるため、その全容はあきらかでない。

方形周溝墓SZ4502 調査区東北部で検出したL字形の溝で、さらに北へと延びる（図155）。SZ4501と同様に、方形周溝墓をめぐる周溝の西南部にあたりとみられる。周溝の幅は約3.0m、深さ0.1mで、東側での削平が著しい。墳丘は削平により失われている。

弧状溝SD4494 調査区東端で検出した溝の一部で、西に凸の弧をなす部分のみが調査区内に現れたもの（図156）。検出長10.1m、幅0.6m、深さ0.4m。重複関係から土坑SK4495・SK4496より古い。埋土は暗灰黄色の細砂またはシルトで、流水に運ばれた細粒堆積物で埋没している。弥生土器片が少量出土した。

斜行溝SD4497 調査区東北部で検出した溝で、南東から北西へと直線的に続き、調査区外へと延びる。検出長約24.5m、幅0.5m、深さ0.3m。遺物はほとんど出土していない。

斜行溝SD4498 調査区中央部やや東寄りで検出した溝で、南東から北西へと直線的に続き、攪乱坑によって寸断されつつも調査区外へと延びる。検出長約31.0m、幅0.5～0.8m、深さ0.4m。埋土は粗砂で、遺物はほとんど出土していない。重複関係から、周溝墓SZ4500の周

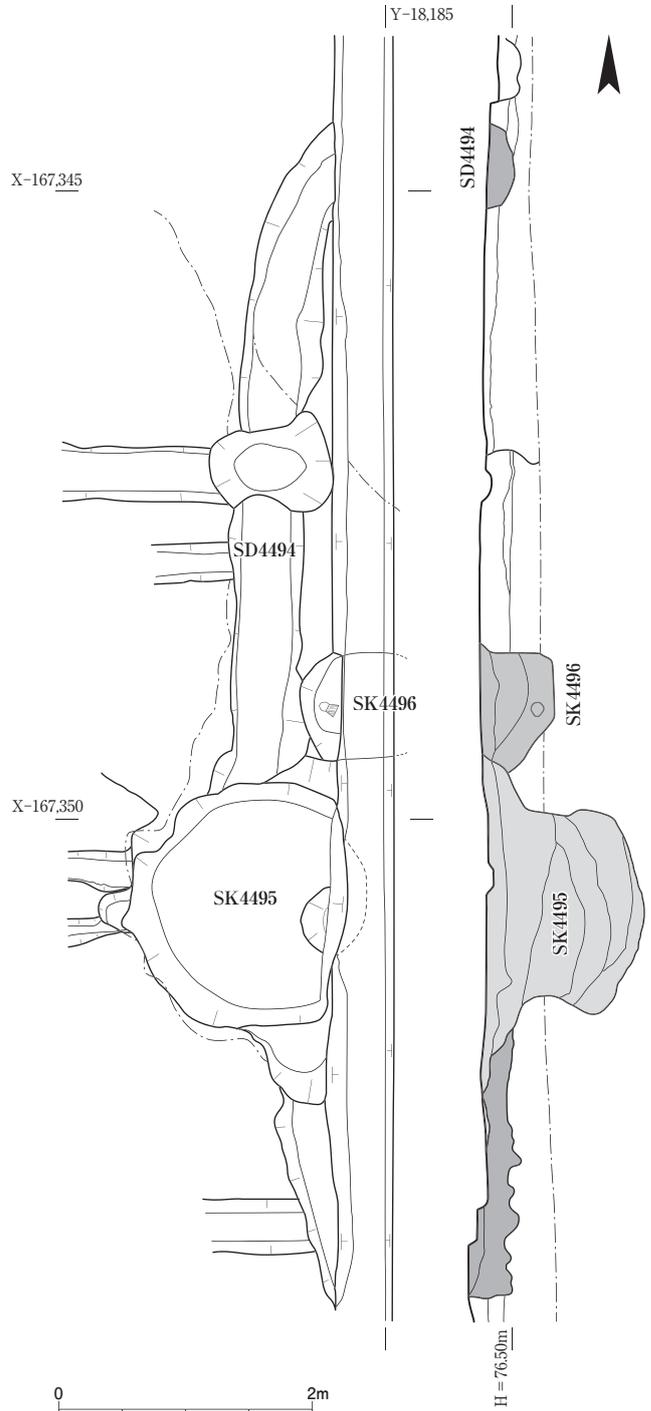


図156 SD4494・SK4495・SK4496遺構図・土層図 1:60

溝よりも古い。

斜行溝SD4499 調査区中央部で検出した溝で、南東から北西へと直線的に続き、調査区の北側へと延びる。周溝墓SZ4500の墳丘にあたる範囲で、その一部を約12mにわたり検出したが、周溝を隔てた南側では攪乱が著

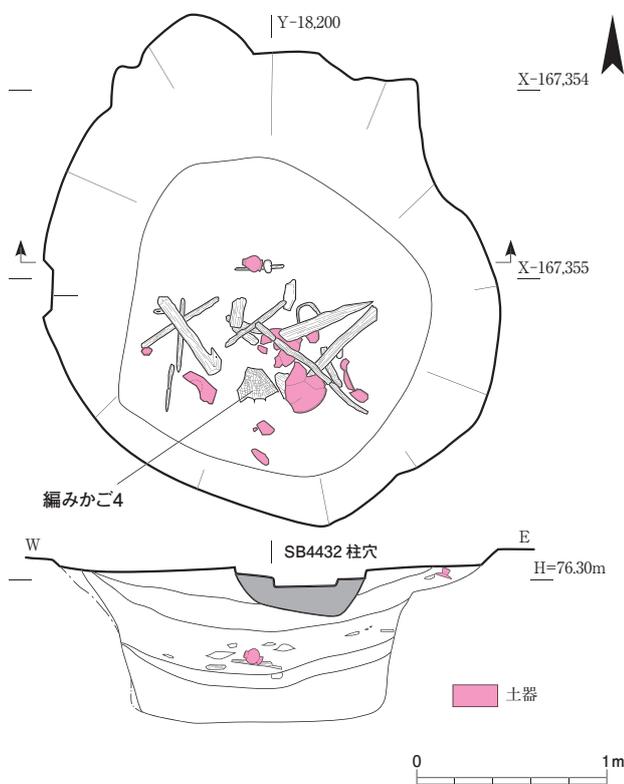


図157 土坑SK4505遺構図 1:40

しいこともあり確認できない。重複関係から、SZ4500の周溝より古く、周溝完掘後に検出した部分がある。

土坑SK4495 調査区東端で検出した土坑で、長径2.5m、短径2.0mの楕円形を呈する(図156)。埋土上層は黒褐色粘質土で、下部は軟弱な青灰色粘質土である。埋土中位から弥生土器・編みかごが出土した。土坑下半は壁面がオーバーハングしている。なお、出土土器の一部が調査区西南部の斜行溝SD4509出土土器と接合している。

土坑SK4496 SK4495の北側にある円形の土坑で、直径約0.8m、深さ0.6m。重複関係からSK4495より古い。埋土上部は黒褐色土、下部は暗灰黄色粘質土である。土坑底から弥生土器の壺が完形で出土している。

土坑SK4503 調査区中央部南半に位置し、攪乱による破壊をかるうじて免れた不整形の土坑で、長径2.9m、短径1.5m、深さ0.5m以上。平面形は概ね楕円形を呈する。埋土からは弥生土器片が多く出土した。

土坑SK4504 土坑SK4505の東側にある円形の土坑で、直径0.9m、深さ0.6m。少量の弥生土器片が出土した。

土坑SK4505 調査区中央部・周溝墓SZ4500の中心近くに位置する不整形の土坑で、長径2.7m、短径2.4m、

深さ0.9m。断面形は逆台形で、底面はほぼ平坦である。湧水が著しい。埋土は上部(黒褐色砂質土)と中部(黒褐色粘土)、下部(オリヅ黒色粘土)とに分かれ、中位付近から弥生土器・ミニチュア土器・編みかご・木杭・先端が焼け焦げた木材等が集中して出土した(図157)。SZ4500の築造に先行するものであろう。

土坑SK4507 SZ4500西周溝の墳丘際で検出した小土坑。前述のとおり、SZ4500の墳丘側から周溝内に流れ込む土器溜SX4506(図14)の下位で検出した。遺構検出面からの深度は0.2mで、下底には凹凸がある。その埋土はシルト質で、土器溜の層準にあたる灰褐色砂質土とは区別できる。弥生土器数個体が出土している。

建物SB4491 調査区東北部で検出した掘立柱建物。桁行3間以上、梁行1間(5.4m以上×3.0m)を検出した。柱間寸法は桁行1.8m、梁行3.0m。柱穴は一辺0.5~0.8mの隅丸方形で、深さは0.4mである。建物は北で西に大きく振れる。東西溝SD4413より古く、周溝墓SZ4502の周溝より新しい。遺構の重複関係から、古墳時代の建物である。

建物SB4492 調査区東北部で検出した南北棟掘立柱建物。桁行2間、梁行2間(4.8m×4.2m)。柱間寸法は桁行2.4m、梁行2.1m。柱穴は一辺0.4~0.6mの隅丸方形で、深さは0.2~0.3mである。北隅柱と南妻柱は南北溝SD4415に壊されている。建物は北で西に大きく振れる。南北溝SD4411より古く、周溝墓SZ4501の周溝より新しい。SB4491と同様に、古墳時代の建物である。

斜行溝SD4509 調査区西南部で検出した溝で、南東から北西へとわずかに蛇行しつつ調査区外へと延びる。検出長約20m、最大幅3.1mで、深さは0.8~0.9mである。埋土は上部から下部にかけて砂と黒色粘土とが互層をなしており、砂層は水流によりもたらされた堆積物である。埋土上部からは古墳時代の土師器甕・大型有稜高杯・小型丸底壺や須恵器杯が、下部からは弥生土器片のみが出土した。調査区東端の土坑SK4495との間には弥生土器の接合関係がある。

縄文時代の調査

藤原京期や弥生時代の遺構や排水溝を掘り下げてゆく過程で、下層の黒褐色粘土が縄文時代の遺物包含層にあたるのが次第に判明してきた。このため、上層遺構面の調査完了後に下層確認調査を実施する必要が生じた

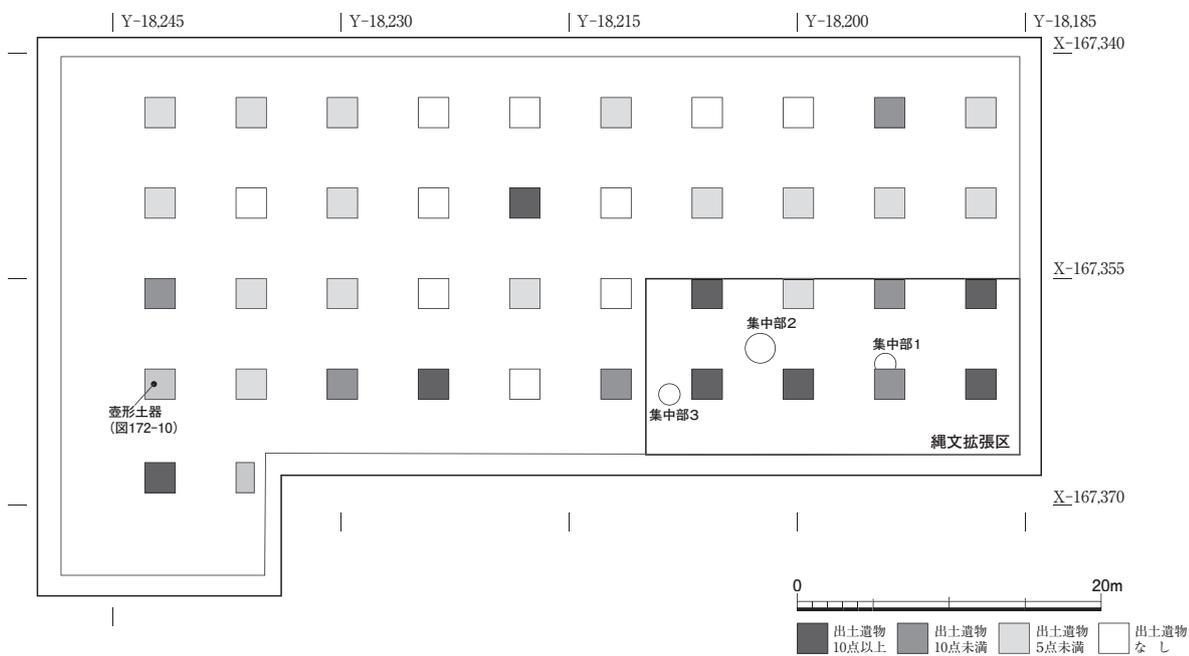


図158 縄文試掘区・縄文拡張区の配置図 1 : 500

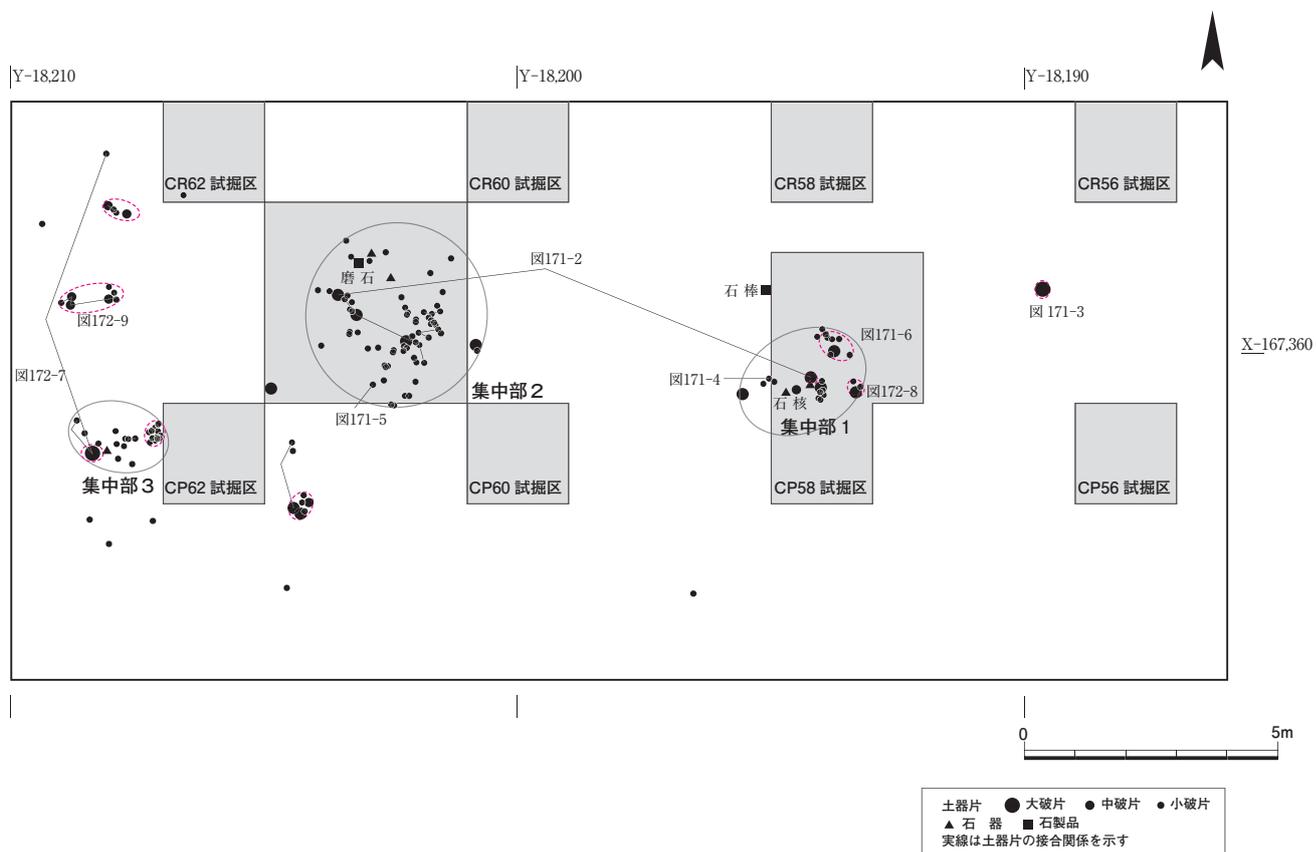


図159 縄文拡張区における土器・石器・石製品の出土分布図 1 : 150

が、調査期間の制約もあり、調査区全域で試掘をおこない、その結果に応じて下層確認調査区を設定し、必要な範囲のみを調査の対象とした(図158)。

試掘調査区は1ヵ所につき2.0m四方とし、これを南北4ヵ所・東西10列(40ヵ所)とした。さらに調査区西南部に2ヵ所を追加し、合計42ヵ所(167.0㎡)となった。それぞれの試掘区は4.0mの間隔で並んでいる。試掘の結果、弥生時代遺構面の基盤層にあたる黄灰色シルトのさらに下位、灰色粘土および黒褐色粘土(古土壤層)から、弥生土器片・石包丁片、縄文土器片、縄文時代の石器が出土したが、ことに遺物が多かったのは調査区東南部であったため、東西24.5m、南北11.5m(約281.0㎡)の範囲で掘り下げをおこない、主として縄文時代遺構の確認と、遺物の回収をおこなった。以下、この調査範囲を「縄文拡張区」とする。試掘調査区と縄文拡張区とを合わせると、重複分を除く調査面積は416.0㎡となり、これは調査総面積のおよそ20%にあたる。

縄文拡張区(図159)では、灰色粘土上面およびその直下にあたる黒褐色粘土上面で精査をおこなったものの、明確な遺構は確認できなかった。しかしながら、黒褐色粘土を掘り下げなかで、縄文土器・石器の集中部1～同3を確認することができた。黒褐色粘土は有機物・炭化物粒に富む砂混じり粘質土で、その上位に灰色粘土が堆積し、さらに一部浸食を受けた上で黄灰色シルトが厚く堆積するまでの間、比較的安定した環境下で発達した古土壤である。黒褐色粘土中の遺物はある程度の深度差をもって出土したが、縄文土器の大破片は平面に貼りついた状態で、しかも互いにつながり合っただけで同一個体とわかる状態で出土するなどし、また土器片の分布にもあきらかな密度差が認められたことから、概ね原位置をとどめているものと思われる。縄文土器・石器の集中部は便宜的に東から集中部1～3とし、もっとも遺物が多く出土した集中部2では、4.0m四方をさらに掘り下げて遺物の回収に専念したが、出土位置を記録できなかった小片も多い。整理作業の結果、集中部1と同2との間で土器の接合関係があると判明している。

出土土器は縄文時代後期後葉のものが主体で、深鉢・浅鉢・壺形土器・注口土器片のほか、環状土製品の破片がある。石器類は剥片石器(2次加工ある剥片・微細剥離痕ある剥片)とその製作残滓(剥片・石核)などのほか、石

棒、磨石が出土した。このうち、2次加工ある剥片で重度の使用痕跡をとどめるものが、主に集中部1・同2と重なる位置で出土しており、何らかの活動にともない使用・廃棄されたものとみられる。このほか、調査区西部の縄文試掘区において、縄文時代晩期の壺形土器が正位を保った状態で出土している。出土状態から考えて、この土器は遺構内に埋納してあった可能性があるものの、明確な掘方は確認できなかった。(森川 実)

4 出土遺物

飛鳥時代・平安時代の土器

第187次調査では、整理箱で109箱の土器が出土した。このうち、大部分を占めているのが弥生土器で、縄文土器がこれに次ぐ。藤原京期の遺構から出土した遺物は総じて少なく、土師器杯・須恵器杯類が溝SD4411・SD4415や土坑SK4422から出土したのみである。このほか、平安時代の土器には井戸SE4435の井筒内から出土したものがある。

図160-1は須恵器壺で、肩部に鋭い稜線をもち、高台は内端で接地する。胴部から口縁部にかけて降灰がある。調査区東南部の土坑SK4422から出土。2は土師器杯C。内面に一段放射暗文を施し、底部外面は不調整にとどめる。調査区東北部の包含層から出土。3はいわゆる「て」の字状口縁の土師器皿で、口径は10.0cmである。金雲母を含む精良な胎土で、灰褐色を呈する。4・5は土師器皿で、口径16.5～17.0cmのものである。強く外反する口縁をもち、底部外面には指オサエの痕跡をとどめる。内面には板ナデ痕を残す。3～5は平安時代の井戸SE4435から出土したもので、いずれも11世紀代のものである。(森川)

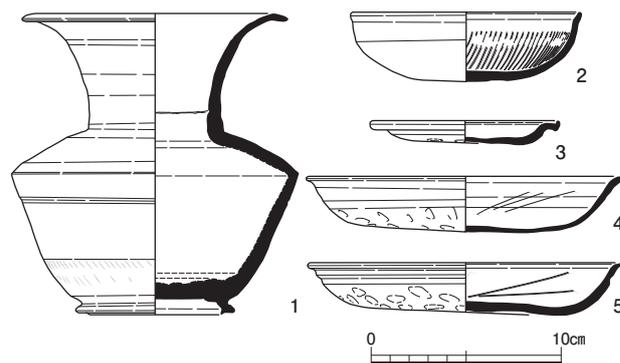


図160 飛鳥時代・平安時代の土器 1:4

瓦 磚 類

第187次調査出土の瓦磚類を表26に示した。

出土量は調査面積に比して多くはない。大部分が床土・包含層および耕作溝からの出土である。軒瓦は型式・種が不明のものを含めて合計9点が出土した(図161)。

軒丸瓦は細片が多いが、井戸SE4435からは瓦当上半部が残る6276Eが出土した(1)。6276Eは本調査地の北西隣接地に所在する本薬師寺からまとまって出土しており、裳階に使用されたと考えられている(『年報 1997-II』)。硬質の焼き上がりで、瓦当厚は薄いタイプ。丸瓦部凹面はケズリとナデで丁寧な布目を消している。凸面も丁寧なナデ調整。本資料は接合部付近を除く丸瓦部の大半と瓦当下半部とを欠損しているが、遺存部分の下半部には、破断面におよぶまで厚く煤が付着している。新しい破断面には煤が付着していないことから、瓦が破損してから廃棄されるまでの過程で煤が付着したと考えられる。

このほか、種が不明の6273(C種か。2)、6276Aa(3)が各1点、瓦当部を欠くが軒丸瓦の丸瓦部とみられるものが3点出土した。

軒平瓦は、三重弧文軒平瓦が1点、弧線数不明の重弧文軒平瓦が2点、包含層と耕作溝から出土した。三重弧文軒平瓦(4)は瓦当厚が3.0cm。段顎で、顎の長さは7.1cm、深さは0.9cm。平瓦部側縁に面取りを施さない。焼成は軟質で、外面は灰黒色、断面は明黄褐色を呈する。他の2点(5・6)については顎部が剥離しているために弧線数は不明。平瓦部の厚みは、5が1.8cm、6が1.5cm。顎の長さはいずれも正確にはわからないが、7.0cm前後であろう。平瓦部凹面の調整は5がケズリ、6がナデ。接合部に刻み目を入れるなどの加工をおこなっておらず、顎部がきれいに剥離している。いずれも硬質の焼き上がり。弧線の施文方法は3点とも型挽きである。

本薬師寺およびその周辺からはこれまでも少量ながら各種の重弧文軒平瓦が出土しており¹⁾、近年も飛鳥藤原第143-3次調査(『紀要 2007』)で完形の三重弧文軒平瓦が2点出土したほか、飛鳥藤原第185-7次調査で四重弧文軒平瓦が出土した(『紀要 2016』)。本薬師寺における重弧文軒平瓦は金堂における使用が想定されているが、主体をなすものではないとされる²⁾。近年、伽藍中心部か

表26 第187次調査出土瓦集計表

軒丸瓦			軒平瓦		道具瓦	
型式	種	点数	型式	点数	種類	点数
6273	?	1	三重弧文	1	鬘斗瓦	1
6276	Aa	1	重弧文	2	隅切平瓦	1
	E	1				
	不明	3				
合計		6	合計	3		

	丸瓦	平瓦
重量	3.94kg	11.77kg
点数	35点	156点

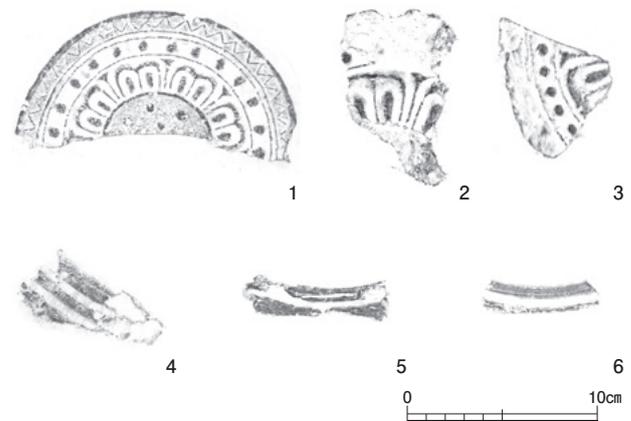


図161 第187次調査出土瓦 1 : 4

ら離れた場所で出土事例が増加し、新たな知見が得られつつあることから、今後、本薬師寺における重弧文軒平瓦の使用実態を解明していきたい。なお、近傍で重弧文軒平瓦を使用している寺院としては田中廃寺が挙げられるが、本調査地とは直線距離でも400mほど離れているため、瓦の流入を考えるのは難しいだろう。

道具瓦は、隅切平瓦が1点と鬘斗瓦が1点出土した。

(清野陽一)

弥生土器・古墳時代の土器

今回の発掘調査では、弥生時代の周溝墓SZ4500から多量の弥生土器が出土したほか、その周辺の土坑・斜行溝からも弥生時代から古墳時代までの土器が多数出土した。このうち、SZ4500の周溝からは、庄内0式期を中心とする土器群がまとまって出土し、周溝墓の築造年代を示しているとともに、この時期の土器群の基準となりうる良好な一括資料となった。

SZ4500東周溝出土土器 黒色土および黒褐色砂質土から出土した土器のうち、面的に投棄された形で出土しており、廃棄時の原位置を保ち一定の共時性を有すると考えられるものを中心に図示した(図162・163)。1~14は

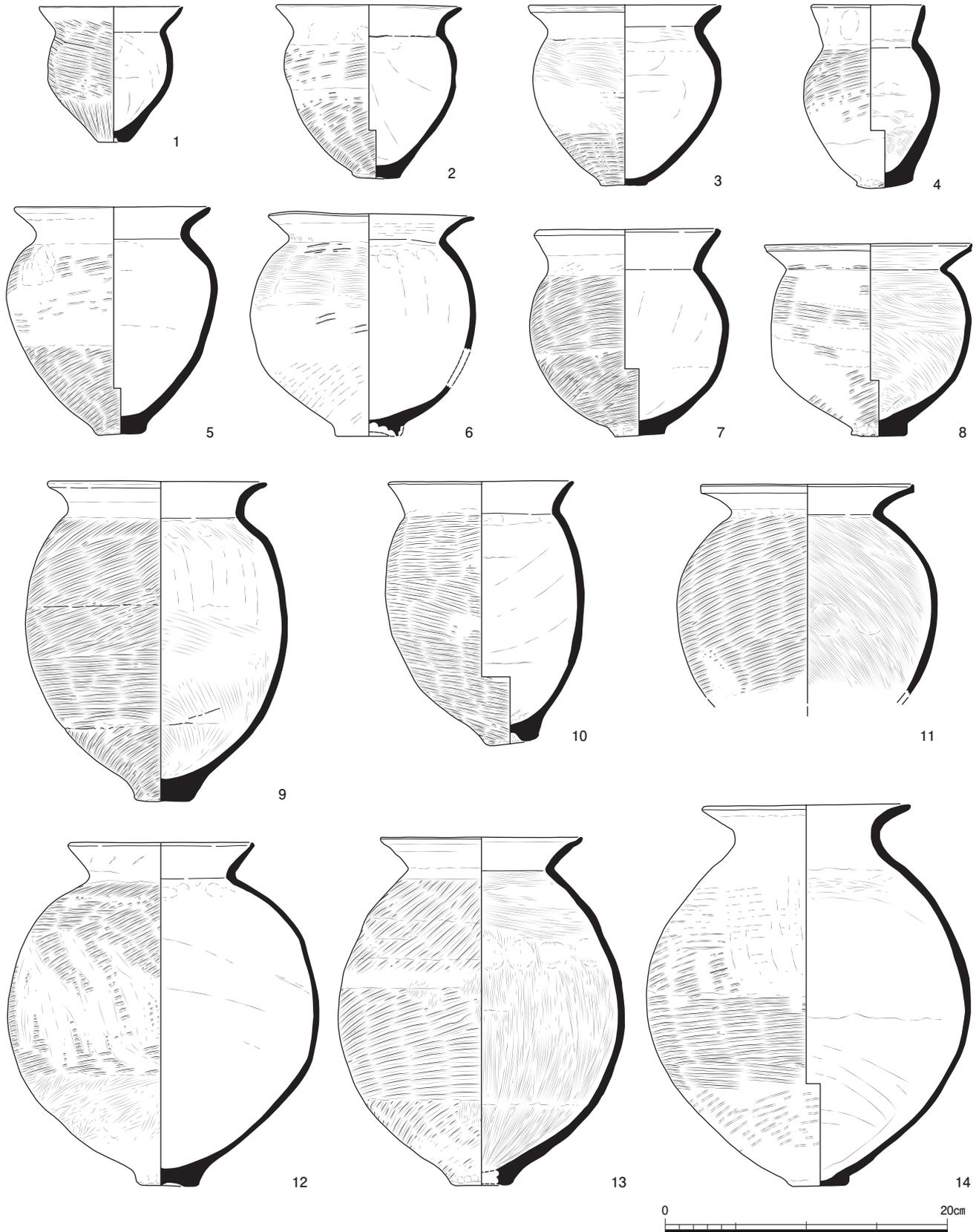


图162 SZ4500東周溝出土土器(1) 1:4

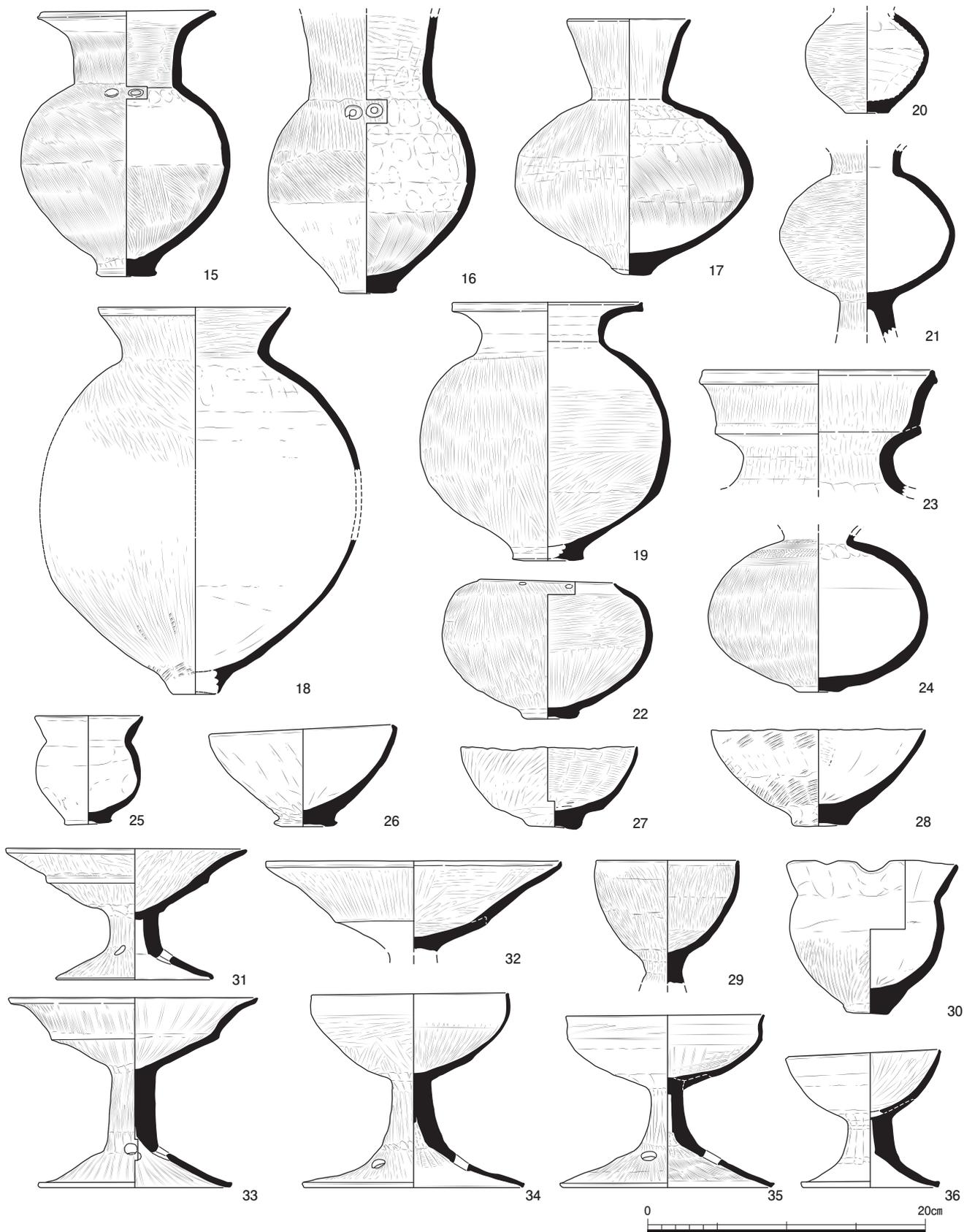


图163 SZ4500東周溝出土土器(2) 1:4

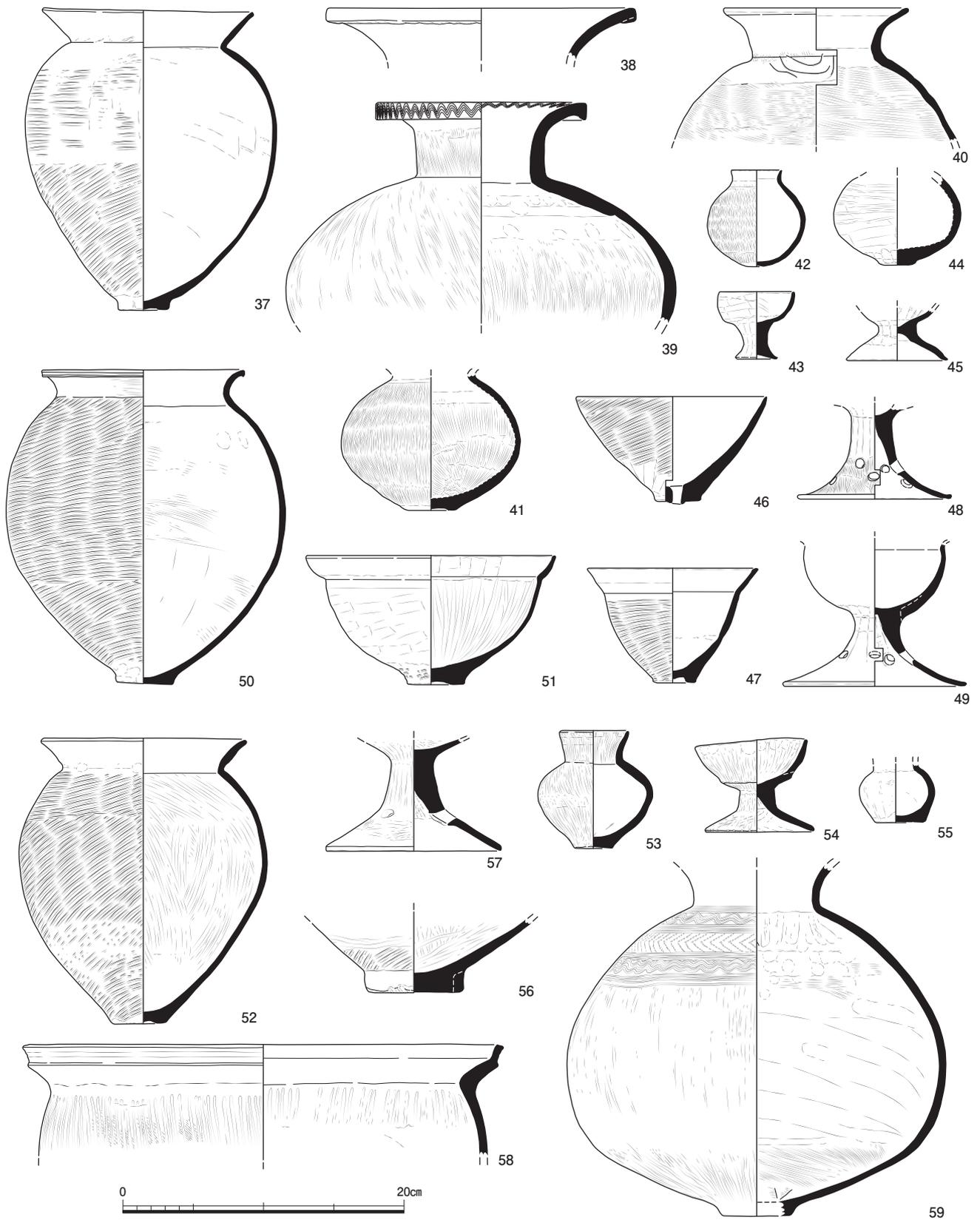


图164 SZ4500西周溝 (37~49) · SK4507 (50·51) · SK4505 (52~59) 出土土器 1 : 4

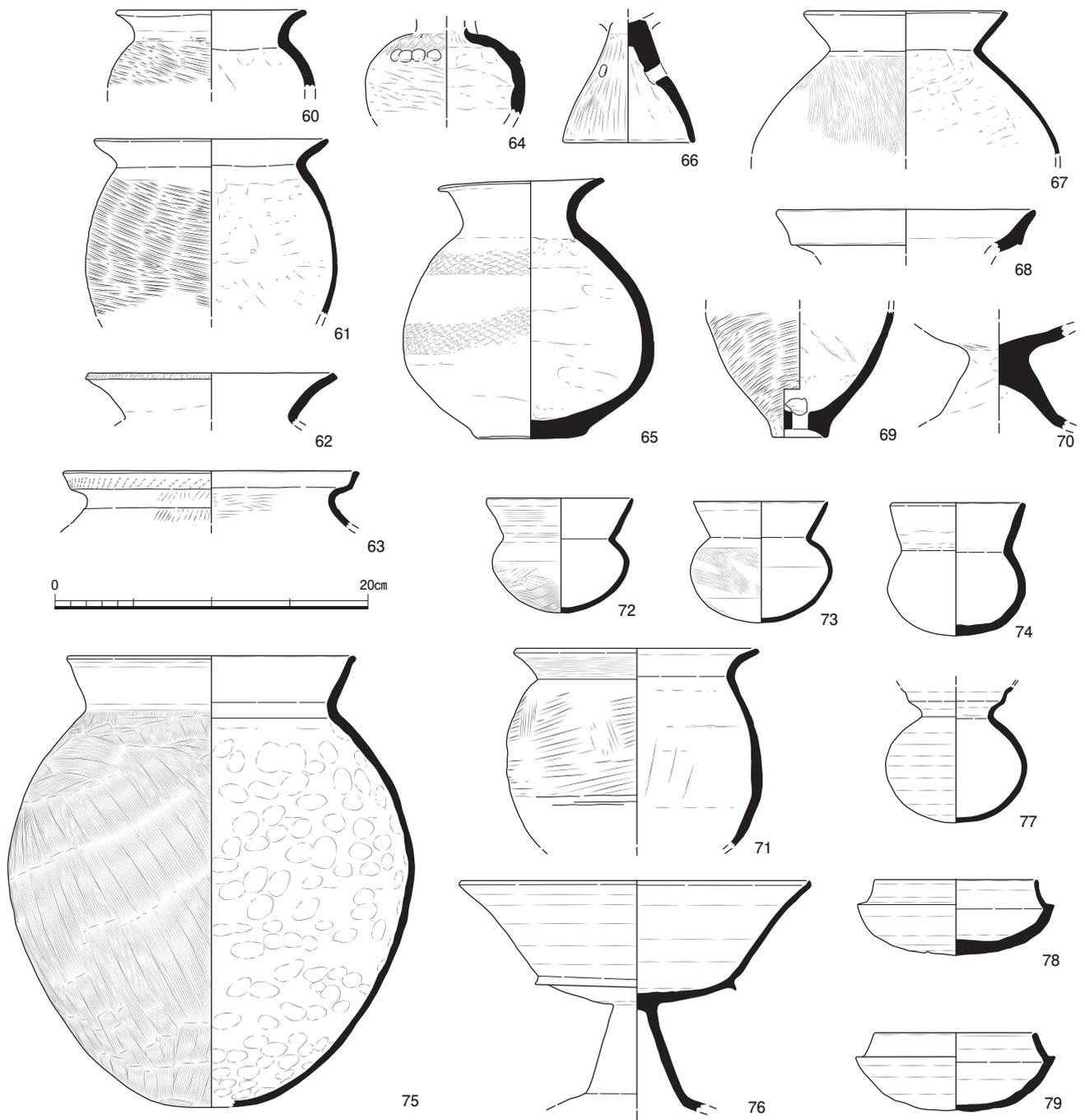


図165 SK4495 (60~66)・SZ4501 (67~70)・SD4509 (71~79) 出土土器 1 : 4

甕。平底をもち、分割成形で外面にタタキを残し、内面をハケやナデで調整するいわゆるV様式系の甕である。法量から高さ20cm以下の中・小型(1~8)、高さ20cm以上の大型(9~14)に分けられる。頸部が彎曲して外に開くものと、くの字形に屈曲するものがある。口縁端部は丸く収めるもの、上方に摘み上げるものが目立つ。

15~24は壺。広口壺、長頸壺、細頸壺、二重口縁壺、無頸壺がある。広口長頸壺15と長頸壺16は肩部に竹管文による記号文を押捺する。17は細頸直口壺。18・19は広口壺。20は小型の壺、21は脚付の壺で、ともに横ミガキが顕著。22は無頸壺で、口縁端部付近に2個一対の穿孔を2カ所に施す。二重口縁壺23は立ち上がり強く、端部

に明瞭な面をナデでつくりだすもの。24は細頸壺とみられ、肩部に櫛描き直線文と同一原体による刺突文を施す。25～30は鉢。29は脚台付の無頸鉢で、外面に煤、内面に水銀朱が付着している。30は口縁部に片口を作り出す。31～36は高杯。有稜高杯（31～33）と椀形高杯（34～36）がある。高杯の脚柱部は基本的に中空であり、完全に中実のものは低脚のものが少数存在するのみである。有稜高杯は口縁部が短く、杯底部が広く深い。1点のみ、杯底部が小さく、口縁部が大きく伸びる（32）。椀形高杯は杯部の口径が広く脚部に高さがある。

SZ4500西周溝出土土器 基本構成は先述した東周溝出土のものと同様変わらない。西周溝の東肩（墳丘斜面の下半）および周溝下層から出土したものを中心に図示した（図164）。墳丘斜面から出土したものは総じて遺存状況が悪い。38は広口壺の口縁部で端部の下面に粘土帯を付加し、小刻みに押捺するもので、東海地方東部からの搬入品とみられる。周溝下層から出土したもののうち、39は広口壺で口縁端部に短く垂下する面をもち、波状文を施す。生駒山西麓地域からの搬入品。40の広口壺は肩部に半円形の重圈文を線刻する。41は西周溝の溝状土坑SX4508の南端に据えられるかたちで出土した壺。42はミニチュアの短頸壺で、周溝埋土最下層（青灰色粘土ブロック層）から出土した。43はミニチュアの高杯。44は小型の壺。45は鉢の脚台とみられる。鉢のうち46は有孔鉢、47はタタキ成形による有頸のもの。49は有頸の鉢に脚台を付すもの。48は高杯の脚で不規則に多数の円孔を穿つもの。球形の胴部に小さな窪み底をもつ。

SK4507出土土器 SK4507出土の土器については墳丘斜面に広がる土器群との区別が埋土と土層の関係から判断が難しく、少なくとも土坑内から出土したもののみ取り上げる（図164）。50はV様式系の甕。51は有頸の中型鉢である。

SK4505出土土器 52～56はSK4505中層で燃えさしや編みかごとともに出土した（図164）。56は大型の壺の底部、52はV様式系の甕で、53～55はミニチュア土器。ミニチュア土器のうち壺53と有稜高杯54は丁寧なミガキで調整する精製品だが、小壺55は手づくねによる。57～59は埋土上層出土。57は高杯脚部。58は有段口縁の大型鉢で、角閃石を多く含み吉備地域からの搬入品とみられる。59は装飾壺。肩部に櫛描きの直線文・波状文、同一

原体による刺突の綾杉文を交互に施文する。

以上がSZ4500に関わる土器である。

SK4495出土土器 出土土器の多くはV様式系の甕や鉢が占めるが、ここでは庄内形甕と、ともに出土した外来系土器について報告する（図165）。60は庄内影響の甕。61は典型的な大和型庄内形甕であり、庄内形甕の中でも古相を示す。62は口縁端部に刻み目をもつ甕の口縁部。63は受け口口縁の甕。64は小型の装飾壺で、肩部に波状文と浮文を付す。65は広口壺で、肩部から胴部に二段帯状に網目状捺糸文を施す。東京湾東岸地域からの搬入品か。66は東海系の高杯脚部。

SZ4501周溝出土土器 67は布留傾向甕。内面は頸部の屈曲部までケズリを施す。68は壺の有段を呈する口縁部。69は有孔鉢だが、内面から穿孔を粘土塊でほぼ塞いでしまう。70はタタキ成形の鉢に脚を付すものである（図165）。

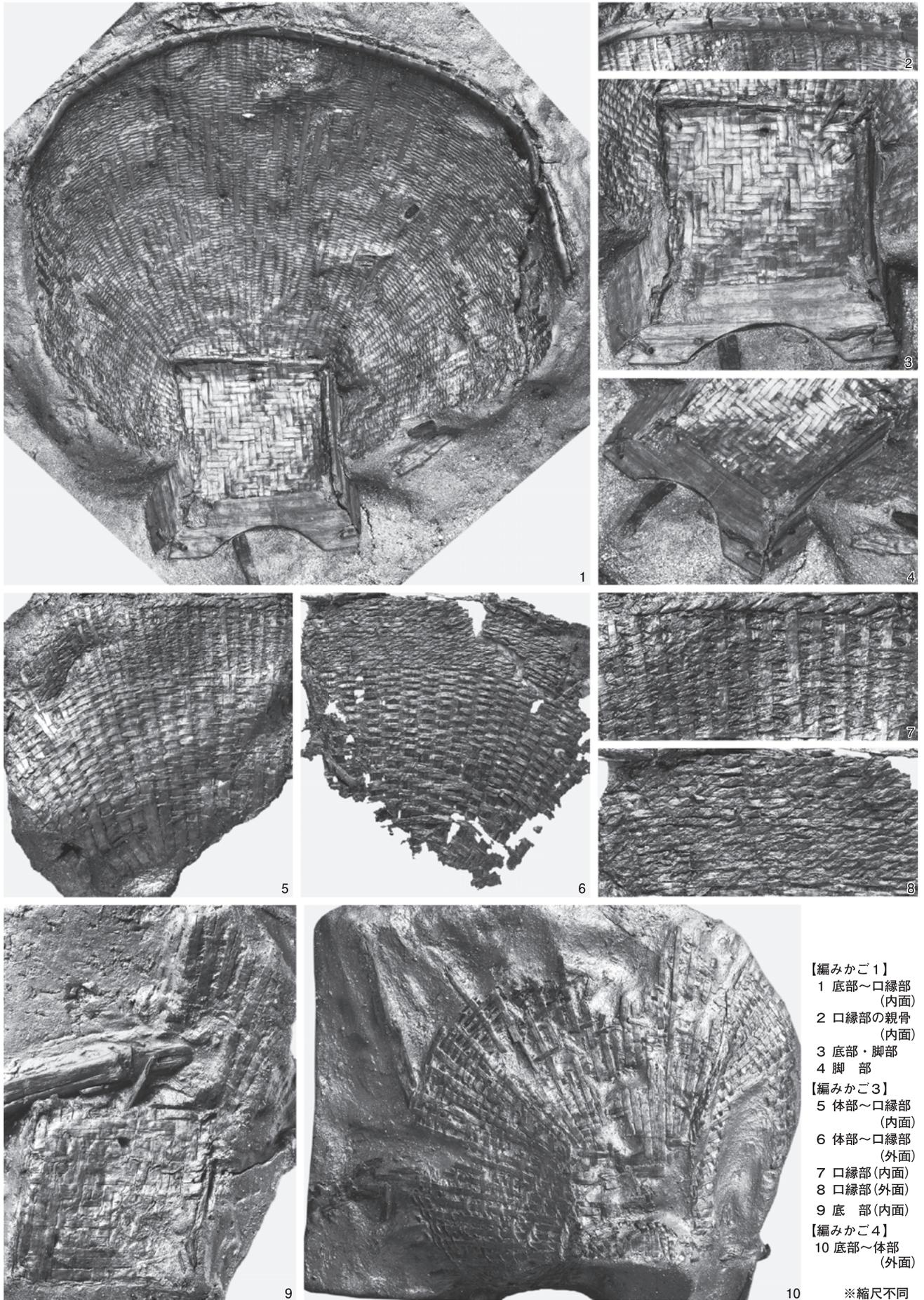
SD4509出土土器 斜行溝SD4509では下層から弥生時代後期末、上層から古墳時代中期の土器が出土している（図165）。下層から出土した土器は細片が多く図化しうるものは少ない。71はV様式系の甕。上層から出土した土器のうち72～77は土師器、78・79は須恵器である。72～74は小型丸底壺。72・73は外面ハケで内面にケズリをほどこし、74は底部外面をケズリで整える。75は甕で胴部の外面をハケ調整、内面には一面にオサエを残す。76は大型有稜高杯で杯の底部と口縁部の境に断面三角形の突帯を添付する。77は小型の二重口縁壺で胴部の外面をケズリで整える。78・79は古墳時代中期の杯身で、このうち79は焼成が不良かつ軟質である。 （山本 亮）

編みかご

第187次調査では、弥生時代の遺構から4個体の編みかごが出土した³⁾。周溝墓SZ4500東周溝（黒色粘土）出土の編みかご1、土坑SK4495出土の同2、土坑SK4505出土の同3・4である。編みかご3は2つの破片に分離しているが、同一個体と考えてよい。所属時期は、共伴土器の時期から、いずれも弥生時代後期末と考えられる。

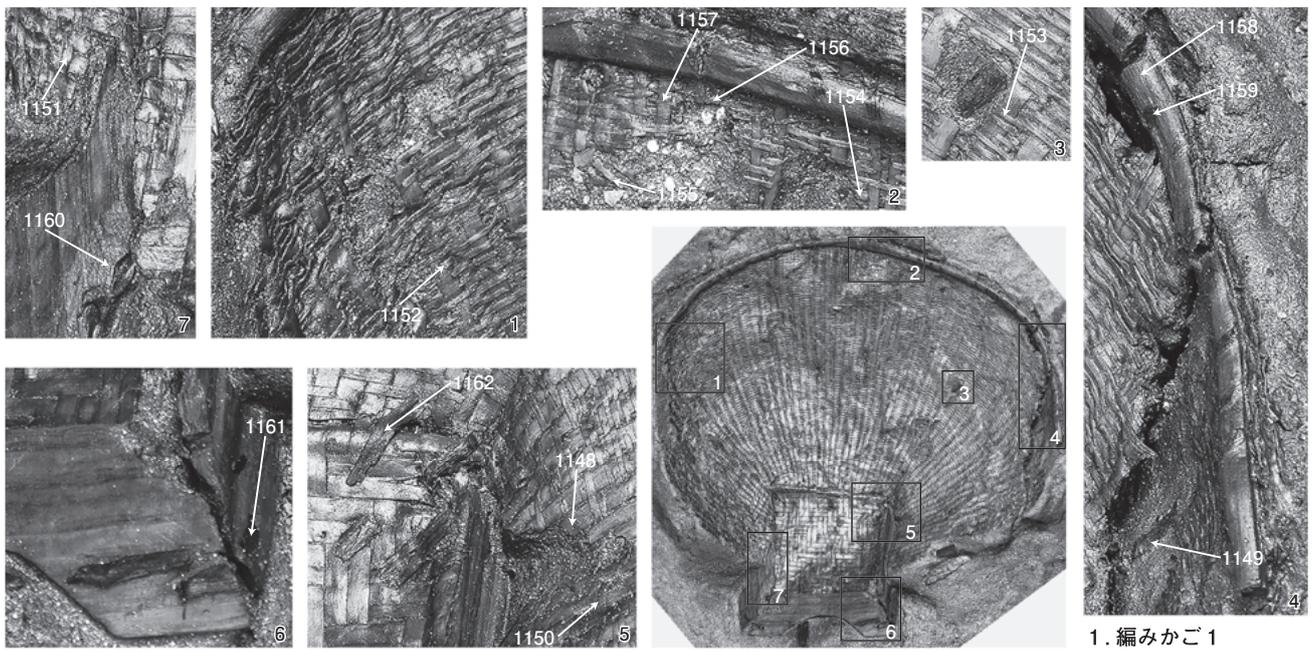
形態と編み方 主に肉眼観察によって把握できた、形態や法量、編み方の特徴について概説する（図166）。

いずれも正方形の底部をもち、口縁部に向かって開く形態を呈する、かご類である。口縁部の平面形は円形と

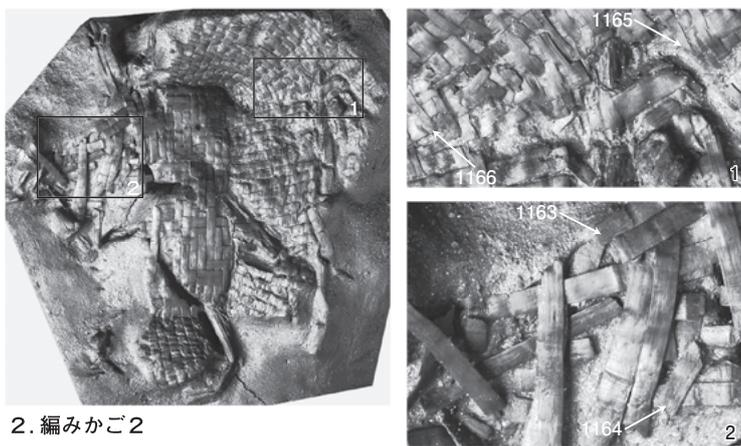


【編みかご1】
 1 底部～口縁部 (内面)
 2 口縁部の親骨 (内面)
 3 底部・脚部
 4 脚部
【編みかご3】
 5 体部～口縁部 (内面)
 6 体部～口縁部 (外面)
 7 口縁部 (内面)
 8 口縁部 (外面)
 9 底部 (内面)
【編みかご4】
 10 底部～体部 (外面)
 ※縮尺不同

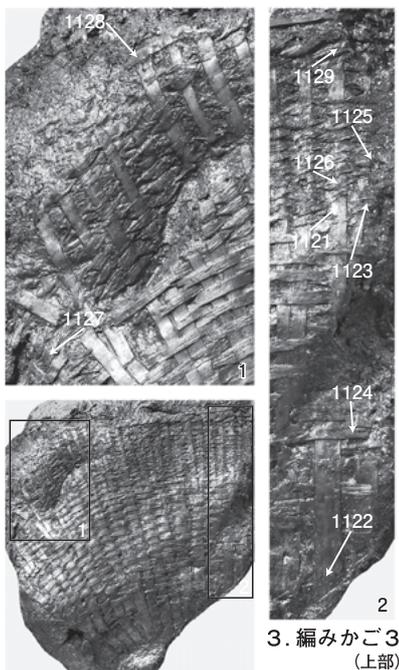
図166 SZ4500・SK4495・SK4505出土の編みかご



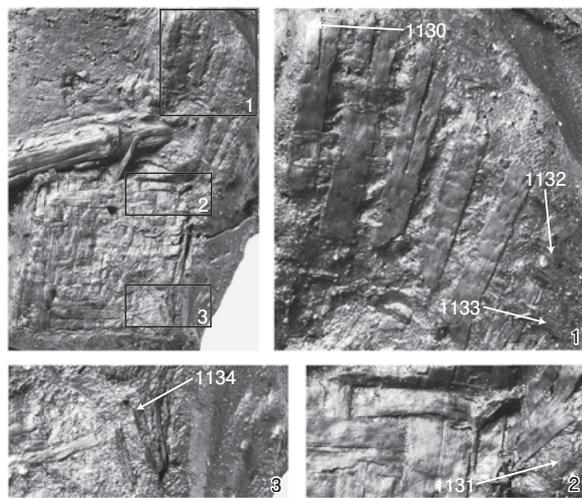
1. 編みかご 1



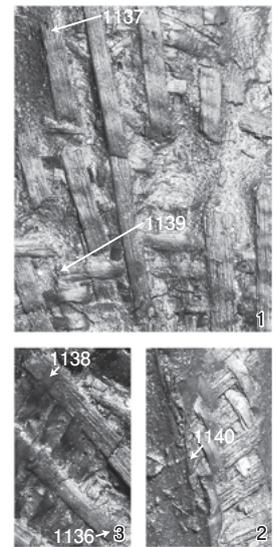
2. 編みかご 2



3. 編みかご 3 (上部)

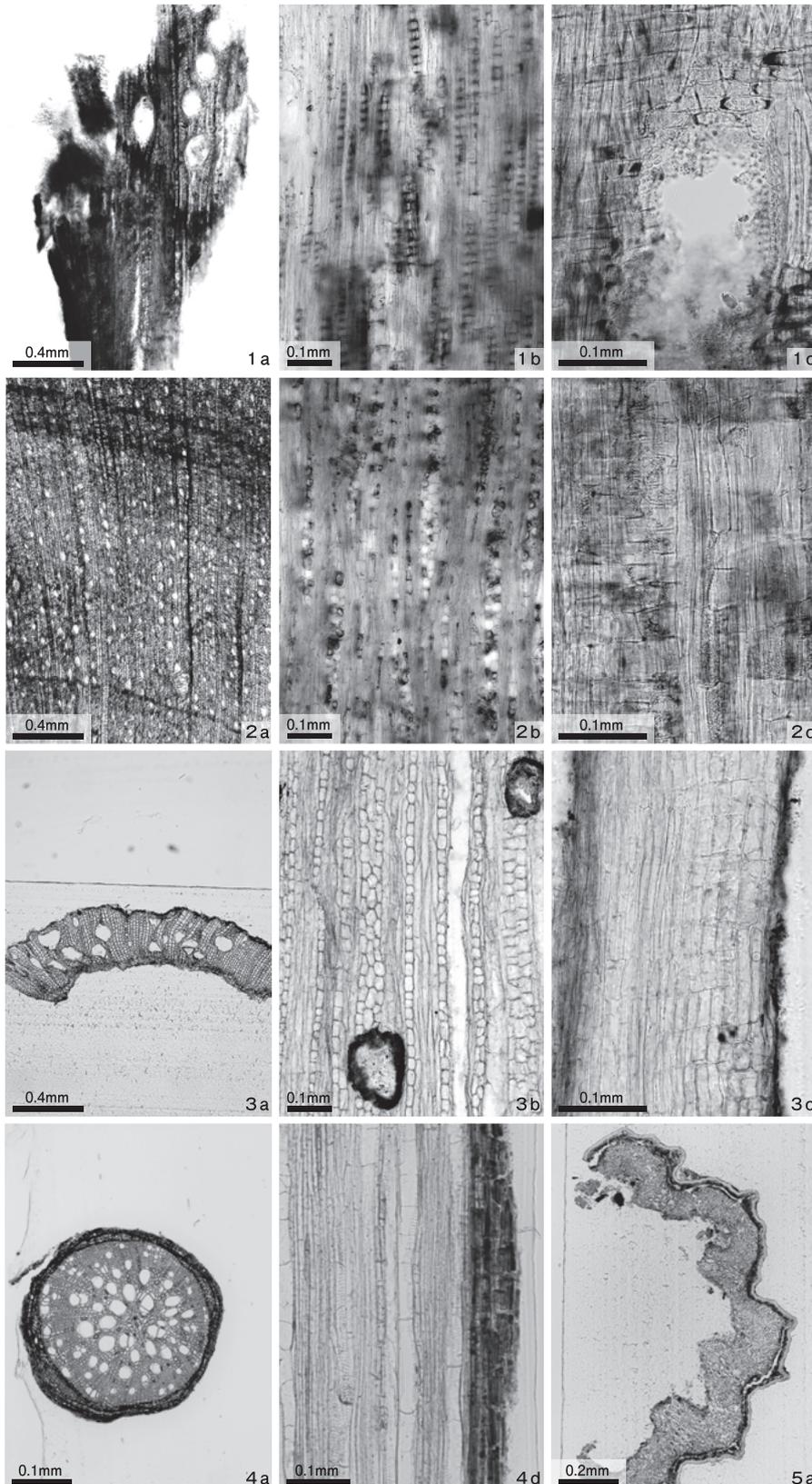


4. 編みかご 3 (下部)



5. 編みかご 4

図167 編みかごの試料採取位置



【植物種の同定結果】

①ツブラジイ *Castanopsis cuspidata*(Thunb.) Schottky ブナ科 (枝・幹材)

大型で丸い孤立道管が年輪の始めに数列配列し、晩材では徐々に小型化した孤立道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は垂な接線状。放射組織は同性で、単列の小型のもの集合状の大型のものとなる。

②ヒサカキ *Eurya japonica* (Thunb.) サカキ科 (枝・幹材)

小型の孤立道管がやや疎らに散在する散孔材。道管の穿孔は40段ほどの階段状。木部柔組織は短接線状。放射組織は上下端の3~数列が直立する異性で、2~3細胞幅。

③テイカカズラ属? *Trachelospermum?* キョウチクトウ科 (枝・幹材)

中~小型で丸い孤立道管が不均一に散在する散孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は異性で背が2mm以上となり、2~3細胞幅。最初の年に形成された年輪しかなく、放射組織も未熟な形態をしており、成熟した組織の特徴が把握できないため、分類群の可能性を示すにとどめた。

④ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科 (当年根)

断面はほぼ円形、大部分が木部で、薄い皮層がある。年輪はない。一次木部は4原型。一次木部から放射状に二次木部の道管が配列する。二次木部道管は薄壁多角形。道管の穿孔は単一、側壁の穿孔は大型で密に交互状に配列する。放射組織は単列異性。

⑤ツツラフジ *Sinomenium acutum* (Thunb.) Rehd. et Wils. ツツラフジ科 (蔓)

半分は裂いた蔓から髓と木部を取り去った表皮皮層部分のみからなる。試料は横断面で波状を呈し、厚いクチクラ、表皮細胞~皮層の基本組織が潰れた残渣、アーチ状を呈する繊維組織の3つの部分からなる。表皮のクチクラはきわめて厚く、その内面は表皮細胞の形にあわせて歯状となる。繊維組織は波状の谷の部分がアーチの脚部、山の部分がアーチ部分である。

⑥タケ亜科 *Bambusoideae* イネ科 (稈)

上面にややクチクラの発達した小さい細胞からなる表皮があり、その内側に2~3細胞層の表皮と同様のサイズで細胞壁の厚い下表皮、さらにその内側に数細胞層の薄壁の柔組織があり、もつとも内側に維管束がある。維管束は表皮側で小さく、稈の中心側(髓腔側)にあるものは大きくなる。発達した維管束では稈の髓腔側に1ヶ所の原生木部、その両外側に1対の丸くやや大きい後生木部道管、原生木部の背軸側(表皮側)に1ヶ所の節部があり、それらを繊維組織が取り囲んでいる。維管束は基本組織中にほぼ均一に分布する。

1 : ツブラジイ (枝・幹材 /1160) 2 : ヒサカキ (枝・幹材 /1158) 3 : テイカカズラ属? (枝・幹材 /1162) 4 : ヤナギ属 (当年根 /1140) 5 : ツツラフジ (蔓 /1161)

a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面 d : 縦断面

図168 編みかごの素材の顕微鏡写真

なろう。器高が正確にわかる資料はないが、編みかご3は器高8cm程度に復元できそうである。底部の大きさは、一辺12cmの編みかご2を最大として、編みかご1が一辺9cm、編みかご3は一辺8cm、そして編みかご4が最小で一辺6cmとなる。このうち、編みかご1には、「四方転びの箱」を利用した脚部が取り付く。

基本の編み方は共通している⁴⁾。すなわち、底部は2本一組の網代編み(2本超・2本潜・1本送)、体下部は飛びごご目編み(2本超・2本潜・1本送)、体上部はごご目編み(1本超・1本潜・1本送)、口縁帯部はヨコ添えもじり編み(2本巻き付け、左撚り)、縁仕舞いは2本一組の巻縁を基調とする。なお、外面から見て、タテ材は髓腔側、ヨコ材は表皮側となる状態で用いられる。

底部の網代編みは偶数本であるが、すべて2本一組の編みかご1、両端のみが1本を単位とする編みかご2・3の二者がある。また、四隅に1本ないし2本のタテ材を足して立ち上げる点も、多くに共通する。なお、編みかご4は、底部縁に沿ってヤナギ属の当年生の根を巻いている可能性がある(詳細は後述)。体下部の飛びごご目編みのうち、編みかご1の編み方は飛び目を折り返すことで波形を形成するものであり、木目ごご目編み(2本超・2本潜・1本送)に該当する。このほか、編みかご3には体上部に帯部が認められ、ごご目編みの中央で、やや太いヨコ材を1段分だけ使用している。

編みかご1上端の丸材は、補強を目的とした親骨と考えられる。口縁帯部の内面に付加されたもので、かご本体に粗く巻き付けて緊縛する。

(和田)

編みかご1の底部に「四方転びの箱」が結合した状態で出土した⁵⁾。台形の板材を4枚、紐で綴じあわせて脚とする。かご本体で覆われているが、4枚の板材が確認できる。板材は柾目で、短辺が残存長6.4~7.5cm、長辺は長さ11.5cm、幅3.6cm、厚さ0.3cmである。結合のための紐孔は、台形の両斜辺に2個ずつ穿たれており、左右の板材を結合する。かごと脚部とは紐による綴じが確認できるが、結合部分は欠損もしくはかご本体に覆われているため確認できない。ほかの「四方転びの箱」から類推すると、斜辺の上部に縦方向(板材どうしの結びに直交する)に綴じた痕跡があるため、本例でもそのような綴じ方が推定できる。また、長辺部分の中心を半円状に削り込み、脚の表現をする。板材の樹種はツブラジイ、紐はツヅラ

フジ。

(浦 蓉子)

素材の植物種と調整手法 植物解剖学的手法を用いて、素材となった植物種の同定、および素材の調整手法の観察をおこなった。各編みかごから部位ごとに、長さ5mm程度の試料を採取した(図167)。タテ材とヨコ材に関しては、各2点の試料を採取した。ただし、編みかご1については、遺存状態が良いため、ヨコ材を3部位(体上部、体中部、体下部)から2点ずつ採取した。

これらの試料は、アセトンの上昇系列により脱水した後にエポキシ樹脂(Agar Scientific社製Low Viscosity Resin)に包埋し、回転式ミクロトーム(Microm社製HM350)を用いて切片作製して観察用プレパラートにした。また、編みかご1の口縁帯部の親骨と脚部(四方転びの箱)については、片刃剃刀を用いて徒手切片を作製し、ガムクロラールで封入して観察用プレパラートにした。なお、これらのプレパラートは、東北大学植物園で恒久的に保管する(NAR1121~1140、1148~1166)。

39点の試料を得た。同定結果は、図168と表27に示したとおりである。

編みかごのタテ材、ヨコ材、ヨコ添え材、ヨコ添え材の巻き付け材は、すべてタケ亜科である。タケ亜科以外の素材が使われているのは、口縁帯部の親骨とその巻き付け材、脚部とその留め紐、そして編みかごの構成材かどうか疑わしい不明素材である。

遺存状態の良い編みかご1をみると、タテ材、ヨコ材、ヨコ添え材、ヨコ添え材の巻き付け材のすべてがタケ亜科である。いっぽう、口縁帯部の親骨にはヒサカキの丸木の枝・幹材が使われている。観察できた範囲では、太さがほぼ均一で真っ直ぐな丸木であり、横枝を切り落とした痕跡もなく、切り株から萌芽した徒長枝を用いたと推測される。また、この親骨をかご本体に固定している巻き付け材は、ツヅラフジの蔓の半割材から髓と木部を取り去った表皮-皮層-繊維組織部分であった。ツヅラフジの地表を這う地表横走茎は、樹木等に巻き付き立ち上がっている空中茎よりもはるかに柔軟である。そのため、通常、かご類等の編組製品には、この地表横走茎が使われる。その木部を取り去った表皮~繊維組織部分はきわめて柔軟であり、目的になかった用材といえる。

脚部は、ツブラジイの柾目の板4枚を四方転び状に組んだものである。この板材どうしの結束には、口縁帯部

の親骨と同じツツラフジの蔓の半割材が用いられている。なお、底部上の遊離材はテイカカズラ属?の蔓を半割した木部を含む素材である。テイカカズラの地表横走茎も柔軟であり、かご類の素材としてよく使われる。ただし、この素材は遊離しているため、底部と脚部の結束材とは断定できない。板材どうしの結束材と、底部と脚部の結束材とは、素材の植物種が異なる可能性もあるが、その理由も含めて不明である。

編みかご4の不明素材は、底部の編み材に沿って編み目を表から裏へ貫通する直線状の丸材で、分枝は一切ない。ヤナギ属の当年生の根である。確認できる範囲では、この材が素材の一部であるか、無関係なものかは不明である。ただし、露出している部分(約3cm)には側根の分枝がみられないので、地中の根ではなく、気根である。ヤナギの気根が、偶然、編みかごの編み目にはまった状態になるとは、考えにくい。なお、ヤナギ属の気根を綴じ紐や綴り紐、かご類の素材等に利用する民俗事例は、アイヌや北米インディアンで知られている⁶⁾。

タケ亜科、いわゆる竹笹類は縄文時代以来現在でも編組製品等に多用されている⁷⁾。瀬田遺跡の編みかごの主素材は、すべてタケ亜科の稈である。素材の調整手法は、稈を割り裂いて、髓腔側を削ぎ落とす手法である。

素材の横断面形態を詳細に観察すると、さらに細かな手法の違いが認められる(図169・170)。まず、割り裂いた稈の髓腔側を削ぎ落とすと、横断面形は三日月状となり、両縁は鋭い刃先状となるので両縁を丸く調整する。このような断面形態のものをA型とする(図169-1・3)。幅を細く調整するため、A型の素材から片方の縁を削り落として横断面楔状とするものを、B型と呼ぶ(同4・5)。また、両方の縁を削ぎ落とすことで、横断面形が細長い長方形となるものを、C型とした(同2)。このほか、タケ亜科の編組素材では、表皮側はそのまま、髓腔側を削って薄く調整するのが一般的だが(同8)、表皮側も削る場合がある(同9)。前者を1型、後者を2型とする。

おおまかな傾向としては、タテ材には幅の広いA型が主に認められ、ヨコ材には幅の狭くなるB型やC型が多く用いられるようである。

素材の幅は、破損したものも含めて、0.5~4mmの範囲におさまり、厚さは概ね0.15~0.5mmの範囲にある。タ

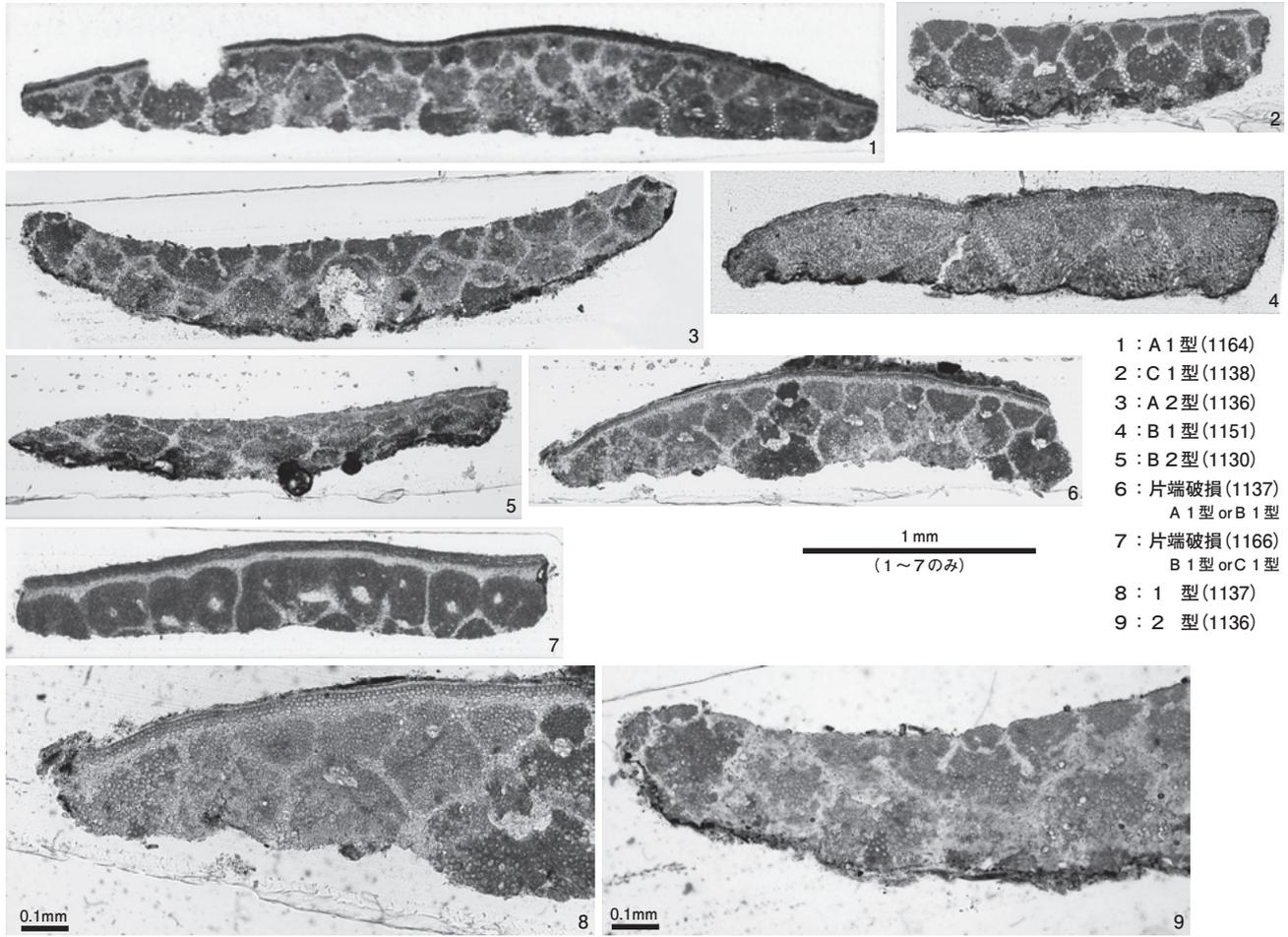
表27 編みかごの素材植物種

名称	試料番号	試料採取部位	植物種	利用部位	調整手法	厚さmm	幅mm
編みかご	1148	タテ材1(体下部)	タケ亜科	稈	A 1	0.43	2.51
	1149	タテ材2(体上部)	タケ亜科	稈	A 1	0.31	3.24
	1150	ヨコ材1(体下部)	タケ亜科	稈	AorB 1	0.73	1.83
	1151	ヨコ材2(体下部)	タケ亜科	稈	B 1	0.48	2.33
	1152	ヨコ材3(体中部)	タケ亜科	稈	C 1	0.40	1.83
	1153	ヨコ材4(体中部)	タケ亜科	稈	BorC 1	0.18	0.88
	1154	ヨコ材5(体上部)	タケ亜科	稈	AorB 1	0.17	0.80
	1155	ヨコ材6(体上部)	タケ亜科	稈	C 1	0.25	1.03
	1156	ヨコ添え材	タケ亜科	稈	AorB 1	0.20	1.27
	1157	ヨコ添え巻付材	タケ亜科	稈	A 1	0.13	0.53
	1158	口縁部部の親骨	ヒサカキ	枝材	—	—	—
	1159	親骨の巻付材	ツツラフジ	蔓半割(皮)	—	—	—
1160	脚部	ツブラジ	木材	—	—	—	
1161	脚部の留紐	ツツラフジ	蔓半割(皮)	—	—	—	
1162	底部上の遊離材	テイカカズラ属?	蔓半割	—	—	—	
編みかご2	1163	タテ材1(底部)	タケ亜科	稈	BorC 1	0.50	2.91
	1164	タテ材2(底部)	タケ亜科	稈	A 1	0.46	3.74
	1165	ヨコ材1(大)	タケ亜科	稈	A 1	0.20	1.92
	1165	ヨコ材1(小)	タケ亜科	稈	AorB 1	0.37	2.50
	1166	ヨコ材2	タケ亜科	稈	BorC 1	0.40	2.30
	1121	タテ材1	タケ亜科	稈	A 1	0.42	2.50
	1122	タテ材2	タケ亜科	稈	A 1	0.33	3.33
	1123	ヨコ材1	タケ亜科	稈	AorB 1	0.25	1.87
	1124	ヨコ材2	タケ亜科	稈	A 1	0.21	1.96
	1125	ヨコ添え材	タケ亜科	稈	? 2	0.24	—
	1126	ヨコ添え巻付材1	タケ亜科?	稈	? 2	0.15	—
	1127	ヨコ添え巻付材2	タケ亜科	稈	A 1	0.21	0.90
1128	口縁部の芯材	タケ亜科	稈	B 2	0.26	1.87	
1129	口縁部の巻付材	タケ亜科	稈	—	—	—	
編みかご3	1130	タテ材1	タケ亜科	稈	B 2	0.26	2.20
	1131	タテ材2	タケ亜科	稈	AorB 1	0.46	3.06
	1132	ヨコ材1	タケ亜科	稈	AorB 1	0.15	1.53
	1133	ヨコ材2	タケ亜科	稈	BorC 1	0.24	1.62
	1134	底部縁の巻付材	タケ亜科	稈	? 1	0.40	1.43
	1136	タテ材1	タケ亜科	稈	A 2	0.43	2.77
	1137	タテ材2	タケ亜科	稈	AorB 1	0.46	2.27
	1138	ヨコ材1	タケ亜科	稈	C 1	0.35	1.53
	1139	ヨコ材2	タケ亜科	稈	AorB 2	0.19	1.50
	1140	不明素材	ヤナギ属	当年根	—	—	—

テ材には幅2mm以上で厚さ0.3mm以上となる、幅広で厚い素材が用いられる。いっぽう、ヨコ材とヨコ添え材、ヨコ添え巻き付け材には、幅2mm以下で厚さ0.3mm以下の細く薄い素材が用いられている。

編みかご1をみると、ヨコ材に関しては、体上部から体中部にかけては厚さ0.25mm以下の薄い素材が用いられ、体中部から体下部にかけては厚さ0.4mm以上の厚い素材が用いられている。立体的な編みかごの器形を形成・維持する上で重要と考えられるヨコ材に関して、部位や器形にあわせて素材の厚みを調整して利用していたと考えられる。

(小林和貴/東北大学植物園・能城修一/森林総合研究所・鈴木三男/東北大学植物園)



- 1 : A 1 型 (1164)
- 2 : C 1 型 (1138)
- 3 : A 2 型 (1136)
- 4 : B 1 型 (1151)
- 5 : B 2 型 (1130)
- 6 : 片端破損 (1137)
A 1 型 or B 1 型
- 7 : 片端破損 (1166)
B 1 型 or C 1 型
- 8 : 1 型 (1137)
- 9 : 2 型 (1136)

図169 編みかごの素材の顕微鏡写真（タケ垂科）

縄文土器

縄文時代の遺物は、かぎられた調査範囲のなかで予想以上に多く、主に黒褐色粘土中から後期後葉を中心とするまとまった土器群が出土した。試掘グリッドおよび縄文拡張区から出土した縄文土器は、整理箱で30箱にのぼる。今なお整理途中であるが、図171・172に黒褐色粘土から出土した代表例を掲げておく。

1は波状口縁の深鉢で、波頂部には2条の凹線をめぐらせた上で巻貝の殻頂部による刺突を施し、胴部にも2条の凹線を2段にめぐらせる。胴部外面上半にミガキを施し、底部外面および内面上半には巻貝条痕が残る。SZ4500東周溝の下底に露出した黒褐色粘土から出土。2は平縁の深鉢で、集中部1と同2との間で、約9.5mを隔てて接合している。外面の口縁部に2条、屈曲部には内部にミガキを施した3条の凹線を配する。口縁部には斜め方向の凹線を入れる箇所がある。内外面を巻貝

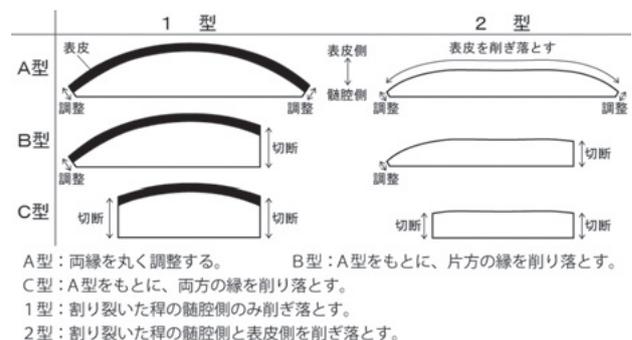


図170 タケ垂科素材にみる調整手法の断面模式図

条痕で調整する。3は粗製の深鉢で、頸部に屈曲をもつ。外面は右上がりの巻貝条痕で調整し、内外面には内傾接合の痕跡がよく残る。4・5は波状口縁の深鉢。4は集中部1から出土したもので、約45m西方の試掘グリッド(CN74区)から出土した土器片と接合している。口縁部に2条、胴部に3条の凹線をめぐらせ、波頂部に巻貝の殻頂部による押圧文を加える。地文は巻貝条痕で調整

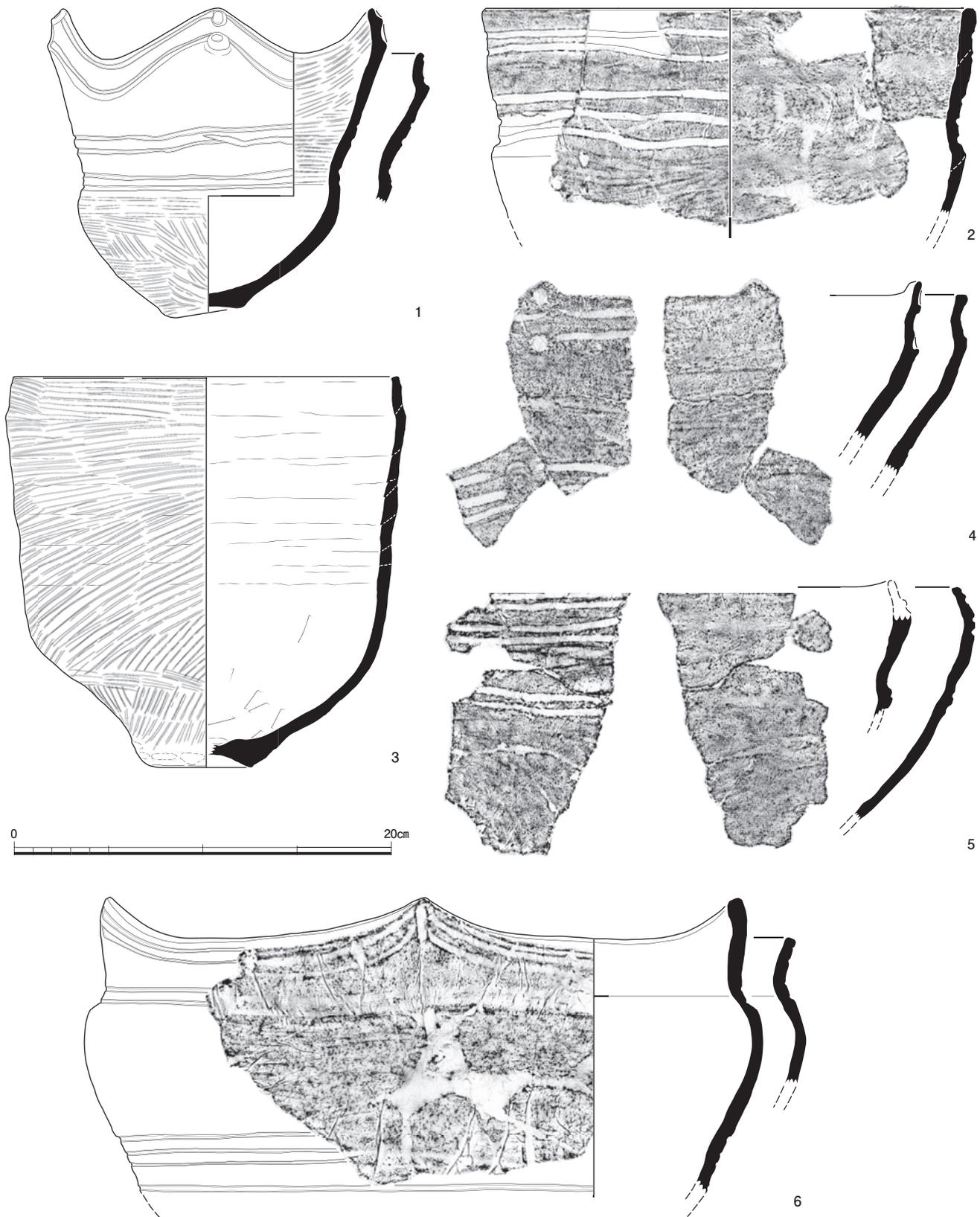


図171 縄文土器 (1) 1 : 3

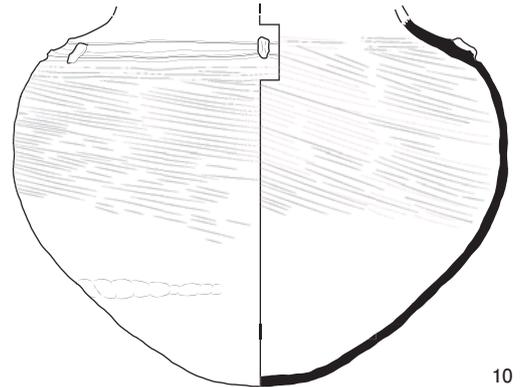
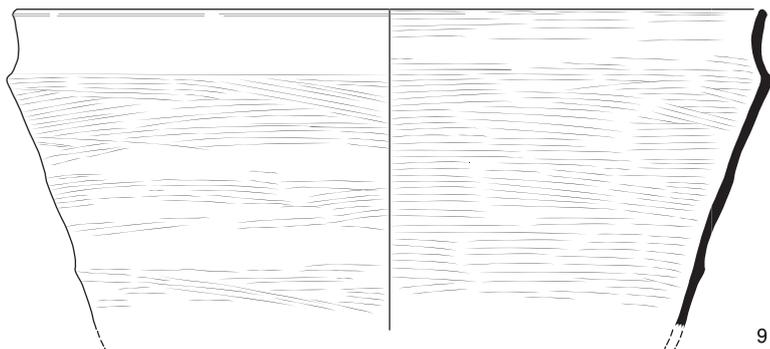
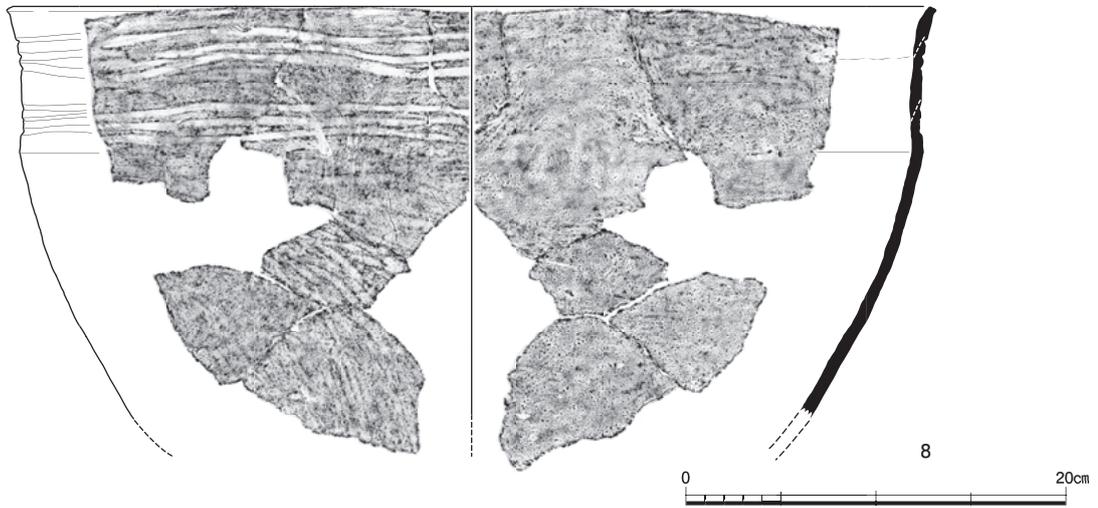
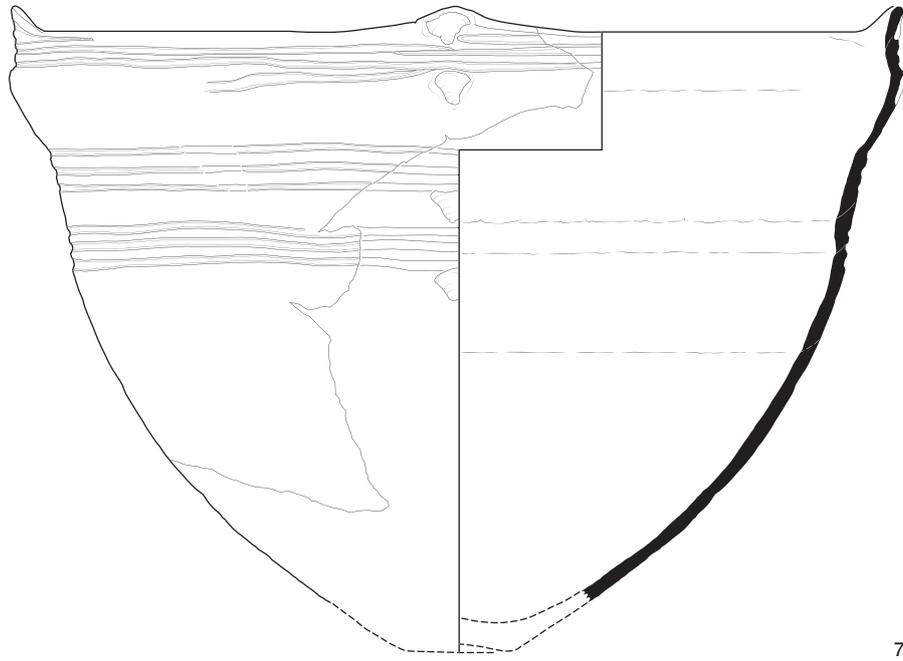


图172 縄文土器 (2) 1 : 4

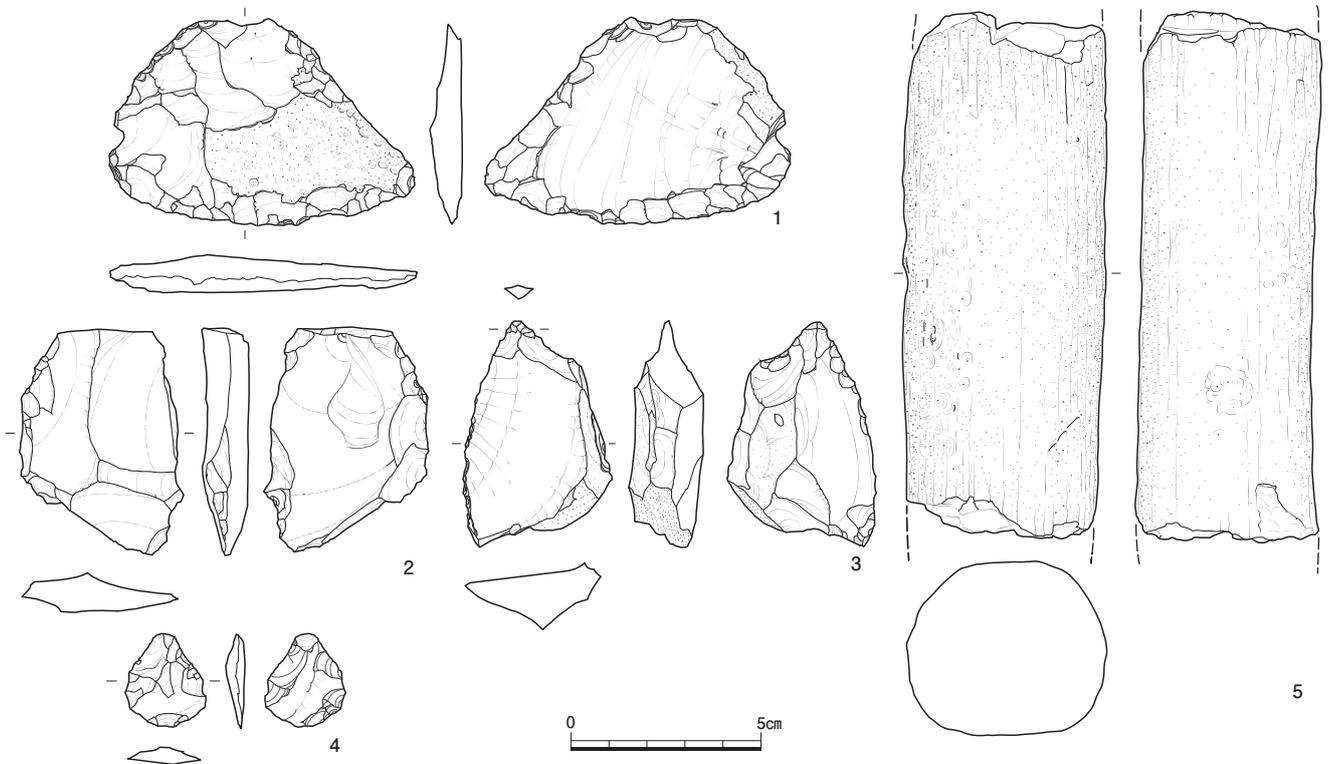


図173 縄文時代の石器・石製品 1 : 2

する。5は浅鉢で、口縁部から胴部にかけて2条単位の凹線を3段にめぐらせる。外面上半はミガキ、下半はケズリ調整で整える。同一個体の波頂部があり、胴部にはV形の沈線と刺突を施す。6は波状口縁の深鉢。口縁部と頸部に2条、胴部には3条の凹線をめぐらせ、その下方には1条の沈線が残る。波頂部には巻貝の殻頂部による縦位の短い凹線文を押し引き、内外面ともに巻貝条痕で調整する。7は波状口縁の大型深鉢で、集中部3から大部分が出土し、その北側6.0mの位置で出土した土器片とも接合する。口縁部と胴部の2カ所に3条単位の凹線文を3段にめぐらせる。図左端部の凹線はとぎれており、その部分の口縁端部には粘土を貼りつけている。扇形の巻貝圧痕は波頂部のところで縦に4つを配する。外面は巻貝条痕で調整し、内面には粘土接合痕が残る。8は平縁の大型深鉢で、直立気味にやや外反する口縁部と、屈曲部に3条単位の凹線をめぐらせる。巻貝条痕で調整する。9は粗製深鉢で、頸部が強く屈曲する。口縁部外面はナデ、その他は巻貝条痕で調整する。10は壺形土器で、調査区西部の試掘グリッドより、正位で出土したもの。口縁部を欠くものの胴部がほぼ残存する。頸部

直下に2本の凹線文をめぐらせ、凹線上の4カ所に短い隆帯を縦に貼りつける。

これらの土器は、1がその器形から元住吉山式、7が宮滝式から滋賀里I式に属するとみられ、これら以外は滋賀里I式の範疇に含まれる。粗製土器(3・9)も、この時期のものとして矛盾がない。ただし、調査区西部の試掘グリッドから出土した壺形土器(10)は滋賀里I式にはみられない器形であり、今後の検討が必要である。また、他の試掘グリッドからは少量ながら後期後葉の宮滝式土器や晩期後葉の凸帯文土器も出土している。

縄文時代の石器・石製品

試掘グリッドおよび縄文拡張区からは縄文時代の石器・石製品が出土した(図173)。サヌカイト製の打製石器とその製作残滓(剥片・石核)のほか、磨石、石棒がある。1は横形削器で、扁平な剥片の側縁に平坦剥離による両面調整を施し、やや弧状をなす刃部を作りだしている。2・3は縄文拡張区において縄文土器とともに出土したもので、2は扁平な剥片の側縁に粗い調整剥離を施した削器である。3は横長剥片の一端に調整剥離を施し、短い錐部を作りだしたもので、素材の背面や打面には風化

が進んだ古い剝離面を残している。4は打製石鏃の未完成品で、両面に素材のポジティブ面を残す。5は両端を欠失した石棒で、表面には敲打痕を一部にとどめる。蛇紋岩製。

このほか、試掘グリッドや縄文拡張区の灰色粘土および黒褐色粘土からは、耳成山流紋岩製の剝片や石包丁片も出土しており、これらの土層が弥生時代にかけて形成されたことを示している。

5 まとめ

藤原京期

今回の発掘調査では、西二坊大路東側溝とみられる南北溝SD4411を検出したことで、西二坊大路の位置を概ねあきらかにすることができた。2015年度の調査(第185-7次)によれば、同東側溝は調査地の北方180mで検出されており(SD480、『紀要 2016』)、今回の調査で確認できたSD4411がその延長線上にあたとみられる。いっぽう、西側溝は削平のためすでに失われていたものの、九条三坊東北坪の東辺を区画するとみられる南北塀SA4431A・4431Bを検出している。西側溝がSA4431AおよびSA4431Bのすぐ東側に位置していたと推定すると、西二坊大路SF4410の幅員はおよそ16mとなる。

また、西二坊大路の東側にあたる九条二坊西北坪では坪内道路とみられる東西道路SF4412を検出し、坪内を分割して利用していたことが確認できた。しかしなが

ら、第187次では西北坪の西端付近を調査したにすぎず、建物等の配置は依然としてあきらかでない。これに対し、西二坊大路の西側にあたる九条三坊東北坪では、同時期とみられる大型掘立柱建物3棟(SB4452・SB4455・SB4456)を検出したほか、先の区画塀SA4431A・4431Bの西側15.0m(50尺)においてさらに南北塀SA4451A・4451Bを検出した。これらの南北塀や大型掘立柱建物は、東北坪の東半北寄りに計画的に配置されており、この地に一町以上を占める施設が存在していた可能性を示唆している。

また、これら大型掘立柱建物とは別に、やや小規模な掘立柱建物(SB4432・SB4433・SB4434)を3棟検出している。これらは柱間がSB4452等に比し狭く、また柱穴も浅い。九条三坊東北坪の中央寄りに配置された大型掘立柱建物とは柱穴の重複がなく、その前後関係はあきらかにできなかったが、九条三坊東北坪の東辺近く、南北塀SA4431A・SA4431Bと同SA4451A・SA4451Bとの間には雑舎群が建ち並んでいたと考える余地がある。

建物や塀からなる九条三坊東北坪の遺構変遷を考えるには、遺構どうしの重複関係が少ないため、厳密を期すのは難しい。しかし、①SA4431AとSA4431B、さらにSA4451AとSA4451Bとの重複関係と、②大型掘立柱建物SB4452・SB4455およびSB4456とが北でやや西に偏しており、同時に存在していたと考えられること、さらに③柱穴どうしの重複は確認できなかったものの、

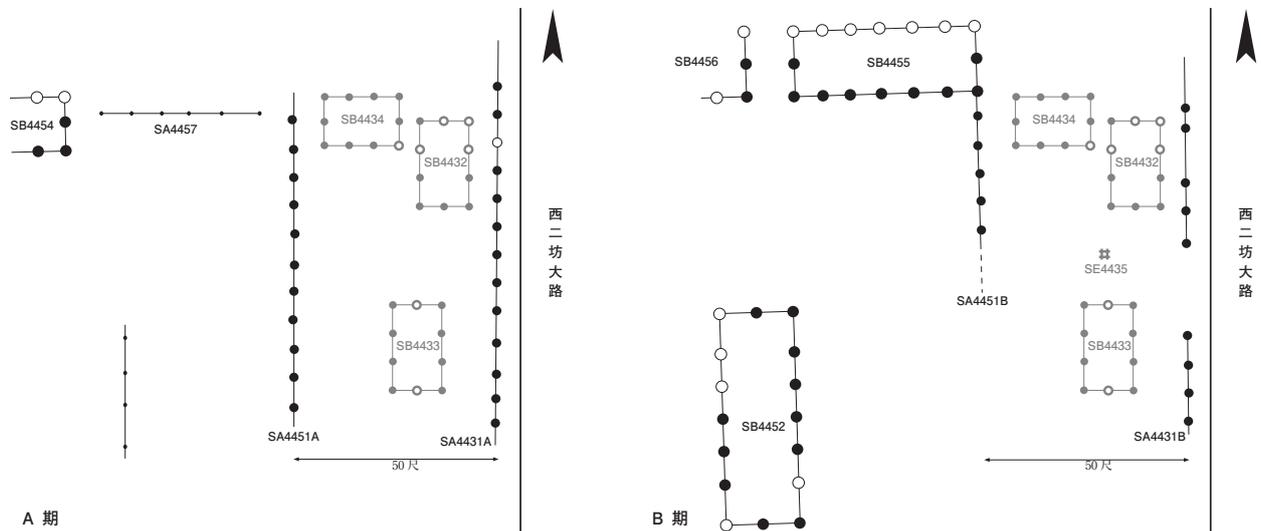


図174 右京九条三坊東北坪における遺構変遷案

SB4454とSB4456とは異なる時期の建物であることなどを手がかりとし、一案を示しておく(図174)。すなわち、新しいほうの南北塀SA4431BとSA4451Bとを同時期とみなし、後者がSB4455に取り付くものと解し、これらをB期とする。SA4431AおよびSA4451Aはこれより古く、両者の間にはSB4432・SB4433・SB4434が建つ(A期)。ただし、これら3棟の掘立柱建物がSB4452・SB4455およびSB4456と併存していた可能性は否定できず、井戸SE4435とともに平安時代に降る案も残る。ともあれ、九条二坊西北坪と九条三坊東北坪とでは、大路を挟んで坪内の利用実態が異なることがあきらかとなり、藤原京の宅地の様相がうかがえる新たな事例を加えた。

なお、円形周溝墓SZ4500は西二坊大路から九条三坊東北坪の一面にあたる。藤原京造営時までは、この周溝墓の墳丘は削平されたものと考えられる。

弥生時代の瀬田遺跡

円形周溝墓の発見 今回の発掘調査で特筆されるのは、大型の円形周溝墓SZ4500の発見である。瀬田遺跡を一躍有名にしたこの円形周溝墓は、直径約19.0mの墳丘に幅約6.0mの周溝をめぐらせ、南側に撥形の陸橋が接続するもので、その形状は前方後円形をなしている。陸橋部を含めた全長は約25.5mである。

周溝の底部付近に堆積した黒色粘土や周溝肩付近の黒褐色砂質土からは、纏向1式もしくは庄内0式の土器群が多量に出土し、SZ4500の周溝が埋没に転じた時期を示している。黒褐色砂質土および黒色粘土の堆積以後、ことに周溝の東半は細砂・シルト互層で埋没してしまう。つまり、これらの土器群はSZ4500の築造時期にかぎりなく近いが、その下限を示すものである。(森川)

SZ4500出土土器 円形周溝墓SZ4500の築造時期を考える上で重要となるのが東側周溝黒色粘土および黒褐色砂質土に含まれる土器群、および墳丘西北部・土坑SK4507付近出土の土器群である。

これらの時期的特徴としては、①甕は基本的に分割成形で外面にタタキ成形痕を残し、平底をもつこと、②壺では長頸壺や細頸壺のように庄内式にはみられなくなる形式が含まれること、③有稜高杯はほとんどが杯底部が大きく口縁部が未発達のもので(ただし1点のみ杯底部が小さく、口縁部が大きく伸びるものがある)、椀形高杯も背が高く杯部が大きく、いずれも典型的な庄内式直前

の様相を示すこと、④典型的な庄内式の構成器種である庄内形甕や小型器台がほとんどみられず、それらの影響を受けたものもみられないこと、などの点が挙げられる。甕では一部に球胴化の傾向がみられるものの、尖底傾向や内面ケズリ調整のように典型的な庄内式以降顕在化する要素はみられない。

以上からSZ4500周溝出土土器の様相は典型的な庄内式の直前、纏向1式もしくは庄内0式を中心とすると考えられる⁸⁾。全体としてSZ4500の築造に関わる時期もほぼ同じと捉えてよい。SK4505を築造前の遺構とみても、その後に周溝が掘削され土器が投棄されるまで、ほとんど時期差はないであろう。周溝出土土器のうち、先に取り上げた甕や高杯で新しい傾向がみられるものは、周溝というオープンな遺構の性格上、最下層が開口していた時期幅を示すと考えられる。その下限は少なくとも庄内式半ばまでにおさまらるだろう。また本遺跡が位置する飛鳥川西岸地域は庄内形甕が希薄とはいえ、瀬田遺跡ではSK4495に示されるとおり確実に存在していることから、定型的な庄内式土器がまったく存在しないSZ4500の周溝掘削時期をそれ以前と捉えうる。

また、今回の調査で検出した遺構のうち、SK4495が古相の大和型庄内形甕を含み庄内式期前半に、SZ4501が布留傾向甕の出土から庄内式期後半に位置づけられる。遺跡が庄内式期を通じて継続することを示すとともに、墓の形態ではSZ4500の周囲に小型方形のSZ4501が付帯する状況がわかる。

纏向石塚古墳との関係 SZ4500の特徴として、全体を前方後円形と形容できるほどの長さの陸橋が挙げられる。墳丘側から外へ向けて開く形態がその後の前方後円墳の前方部を想起させる。

前方後円墳の成立過程を論じる研究史の上でいえば、これまで有力視されてきたのは主墳丘への「道」となる墳丘墓の突出部や周溝墓の陸橋が発達し、前方部となったものである⁹⁾。SZ4500では削平もあり検出できなかったものの、陸橋の付け根や中間に区画溝がみられることがあり、これが発展して突出部(前方部)へ発展するとされる。庄内式以降、近畿地方を中心に広い地域で後円部径と前方部長の比が2:1となり、定型的前方後円墳の祖形とも評価される「纏向型前方後円墳」が展開する¹⁰⁾。SZ4500は墳丘部の径と陸橋の長さの比

がおおよそ3:1であり、かつ陸橋が外側付け根で切り離されず「前方部状」を呈さないため、墳丘と陸橋・前方部の関係を型式学的にみれば古相の纏向型前方後円墳である纏向石塚古墳のさらに前段階に位置づけられる可能性がある¹¹⁾。

さらにいえば、SZ4500はほぼ正円に近い周溝平面形をもつものに対し、纏向石塚古墳の周濠は馬蹄形である。纏向石塚古墳は後円部側では後円部墳丘径と周濠幅の比がおおよそ4:1~3:1程度とSZ4500に近い値を呈するが、周濠の平面形を長大化した前方部にあわせ拡張した結果、周濠外形が馬蹄形を呈するよう変化したと捉えられる。また纏向石塚古墳は前方部前端側の周濠が他の部分よりも狭くかつ浅く、周溝墓の区画溝からの発展が考えられる。以上のように、SZ4500のような周溝墓から纏向石塚古墳へと継起的に発展したものとして捉えられる。同時にSZ4500の存在によって、少なくとも弥生時代後期末以降、前方後円墳発生への道筋が大和盆地の中で追えるようになった。

(山本)

縄文時代の瀬田遺跡

今回の発掘調査では、調査期間の制約などから、縄文時代の調査は部分的に実施するにとどまったが、調査面積の約20%につき下層確認をおこない、縄文時代後期から晩期にかけての土器・石器類が数多く出土した。それらは宮滝式から滋賀里I式の土器で、石器類とともに3つの集中部をなして出土したものである。明確な輪郭は確認できなかったものの、何らかの遺構が存在していた可能性がある。

第187次調査地の南方約200mにおけるセンター敷地内での調査(檀考研2007年度調査)¹²⁾では、落ち込みSX10から縄文時代後期の土器が多量に出土している。その主体は北白川上層式で、第187次調査で出土した縄文土器よりも古い。また、調査地の西南方約200mでは縄文時代晩期の土器棺墓や湿地状の落ち込みなどを検出している(檀原市2001-10次調査)¹³⁾。今回の調査成果を加味すると、瀬田遺跡は主に縄文時代後期から晩期にかけての遺跡であり、調査地点によって時期が異なっている。これまでのところ、瀬田遺跡では竪穴建物などは見つからないが、縄文人の居住域が、時期が降るにつれ少しずつ移動していったことがうかがえる。

なお、前述した檀原考古学研究所や檀原市教育委員会

の調査でも、基本層序は今回の調査で確認したものとほぼ同一であるため、ここで「黒褐色粘土」と称した古土壌が、広範囲に広がっているのは確実である。縄文時代の瀬田遺跡は、田中廃寺のほうから北西へと延びる尾根筋の西側緩斜面にあたり、水流でもたらされた土砂の堆積が進む場であって、堆積の休止期に草木が繁茂し、土壌の発達する安定した時期があった、といえる。縄文人の活動痕跡は、このときに残されたのである。縄文時代の瀬田遺跡を考えると、遺跡とその周辺の古環境や地形発達も考慮に入れる必要があろう。

(森川)

註

- 1) 『年報 1997-II』、花谷 浩「京内廿四寺について」『研究論集 XI』奈文研、2000。
- 2) 前掲1) 花谷論文。
- 3) 編みかごの観察に際しては、鈴木三男、小林和貴、佐々木由香(パレオ・ラボ)、能城修一、西原和代(京都大学大学院生)の諸氏から多々ご教示いただいた。また、植物解剖学的分析では、鈴木・小林・能城の諸氏が実際の作業にあたった。
- 4) 編み方の名称は、おもに下記文献に依拠する。野田真弓・本間一恵「青谷上寺地遺跡出土のかご」『青谷上寺地遺跡出土品調査報告1』鳥取県埋蔵文化財センター、2005。
- 5) 観察に際して、上原真人から教示を得た。
- 6) 北海道立北方民族博物館編『アイヌと北の植物民族学』、2005。八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館編『トーチムボールのひとびと』、2014。
- 7) 堀川久美子「日本における遺跡出土カゴ類の基礎的研究」『植生史研究』第20巻第1号、2011。佐々木由香・小林和貴・鈴木三男・能城修一「下宅部遺跡の編組製品および素材束の素材からみた縄文時代の植物利用」『国立歴史民俗博物館研究報告』第187集、2014。
- 8) 石野博信・関川尚功『纏向』檀原考古学研究所、1976。寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』檀原考古学研究所、1986。
- 9) 近藤義郎『前方後円墳の時代』、1983ほか。
- 10) 寺沢薫「纏向型前方後円墳の築造」『考古学と技術』同志社大学考古学シリーズIV、1988。
- 11) ただし、纏向石塚古墳は庄内3式の築造とされるなど、纏向古墳群の諸古墳と瀬田遺跡・SZ4500とは時期にヒアタスがある。規模の隔絶性も大きく、この間に区画溝をもつ中間形態の墓の存在が想定される。桜井市教育委員会編『纏向石塚古墳発掘調査報告書』、2012。
- 12) 檀原考古学研究所「藤原京右京九条二坊」『奈良県遺跡調査概報』(第二分冊)、2007。
- 13) 檀原市千塚資料館「藤原京右京九条三坊の調査」『かしの歴史をさぐる』10、2003。